
君が1番…………

英 里 子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が1番……

【Nコード】

N9722H

【作者名】

英 里子

【あらすじ】

ここはエニシタウン。

古きよき時代の建物が立ち並ぶ由緒正しきニホン町。

ここでは毎年、大規模な花火大会が催されている。

恋愛なのかギャグなのか、よくわからない波瀾万丈の物語を生粋の苦勞人星河スバル+αが繰り広げる。

※擬人化や自分設定などオリジナル過ぎる要素満載ですので悪しからず…。

0. プロローグ

僕はここにきたことがある。
随分前のことだけど。

幼い僕は空に咲く、あの花達に魅了され、また見てみたいと思っ
た。

そうだ、

行ってみないかい。

僕のおき場所。

君と一緒にみたいんだ。

0..プロローグ（後書き）

お初にお目にかかります。英 里子と申します。今回が初投稿作品となります。これは自分が運営しているサイトで載せているもののリメイク版となっております。公表する場が他にあるのに：とお思いになる方がいらっしやると思います。理由が簡単、他の小説家の方々と切磋琢磨したいと存じ、閲覧されている方々からのご意見を頂きたいと思ったからです。井の中の蛙のままより大海を知りたいと思っています。プロローグより後書きの方が長くなってしまうしたね（汗）若輩者ですが今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

1..成り行きだけどうまくいき(前書き)

やっと本編です。ここではスバル君とミソラちゃんは付き合っている、という設定でおおくりいたします。それではどうぞ

1..成り行きだけどうまくいき

「…………それで委員長達皆と行くんだ。どうかな？」

「行く行く!!ぜったい行く!!」

「じゃあ日曜日の6時、ウェーブライナー乗り場で。」

「了解♪じゃあねスバル君。」

プツン

僕は電話の電源を切った。

こんばんは。僕の名前は星河スバルです。

世界の窮地を3度救ったこと以外はごくごく普通の少年です。

後一つ普通でないことがあるとすれば、さっきの電話相手の女の子、国民的アイドルにして人気爆発中のシンガーソングライターこと響ミソラが僕の彼女ってことぐらいです。

今日僕は彼女にお誘いをしたんです。

日曜日に昔ながらのニホンの町並みを残した町、エニシタウンという所で大規模な花火大会があるんです。

それに今日の放課後、僕とお馴染み委員長軍団、ツカサ君、ジャツクの皆で行く約束をしました。

――――――

「じゃあ決まりね。あ、全員浴衣で参加よ。」

「おお！なんか祭って感じだな！」

「確かに趣がありますね。」

「俺、浴衣なんか持ってたねえよ」

「問答無用よ！！」

「な！！」

「委員長、僕も持ってないんだ。」

「ツカサ君も：いいわ、ツカサ君とジャックはお祭りの前にうちに来なさい。用意しとくわ。」

「ありがとう委員長。」

「さっすが！太っ腹だぜ！！」

「オホン。まあ言い出したのは私だしね。おだてても何にもでないわよ。…ところでスバル君、あなたは持ってるのよね、浴衣。」

「え、う、うん。多分ね。」

いきなり話を振られたので僕は焦った。

「多分！？はっききなさい！！」

「え、そんな、あ、あると思い、あ、あります！！」

「そう、あなたもうちで貸してあげようと思ったけど…」

「あ、ならもしなかったら…」

「あなたに貸すんじゃないの、ロックマン様に貸すのよ／＼」

「ええ！？まあ別に…あると思うけど。」

「そう、残念。」

「……………」

委員長はロックマンの正体を知った今でもロックマン狂だ…

「ミソラちゃんは持ってるのかな。」

ツカサ君が思いもよらない発言をした。

「え？」

「そうね、あの子。スバル君どうなの？」

「え？」

「そうだぜスバル ミソラちゃん持ってるのかよ。」

「え？」

「先日のサマーライブでは着てましたが、どうなんですスバル君。」

「え？」

「お前がくるならミソラもくるんだろ」

「そうなの!？」

「「「「違う(の)(のか)(んですか)」「」「」」

「……………」

どうやらミソラちゃん存在を忘れていたのは僕だけらしい。
忘れていた？ち、違う、断じて違います!!
……………違うってば!!

——————

そんなこんなで僕はミソラちゃんを誘いました。

皆で、とはいえ、一緒にでかけられることができて僕としても嬉しいことです。

今日は木曜日なので日曜日まで後3日、待ち遠しくて仕方がないです。

(エニシタウンって…確か昔…)

ふとこんなことを思い出しながら僕は布団の中に潜り込みました。

(あ、浴衣のこと…言ってないや。また…明日電話しよつと……)

また電話をする口実を見つけた僕は夢の中に落ちました。

1..成り行きだけどうまいき（後書き）

会話の間にうまく会話以外のこと（心情等？）を入れません（ア
ワワ）課題ですね……。自分は流星を一度もプレイしたことがな
いので性格や口調が曖昧です…とくにジャッ君！！3アニメ化希望
です それでは、閲覧いただきありがとうございました

2..空に溶け込む今日この頃（前書き）

注意 この小説では世にも珍しいロックとハープの擬人化設定が盛り込まれています ご注意ください

2..空に溶け込む今日この頃

今日は日曜日、天気晴れ、絶好の遅起き日和――

『…スバル、おいスバル』

今日は日曜日、天気晴れ、絶好の遅起き日和――

『起きやがれスバル!!』

今日は日曜日、天気晴れ、絶好の遅起きびよr『もういいらねえよそのナレーション!!』

「な～に～ウォーロック～ 流星3がアニメ化だっ～?…」

『何いっちゃってんだよ!!――って寝るな――!!』

「うわ～～～!!」

僕は青い電波生命体によってベッドから落とされた。

『どんくせえな、まったく』

結構高い所から落ちただけど。
心配してくれたっていいんじゃない?

『大丈夫か、スバル?』

ああ 君って優しいんだね……………

「寝るなスバル!!」

バチィン

「痛く!! 君を優しいと思った僕が馬鹿だったよ!!」

「なんのことだよ!!」

「たつく…てゆうかいつのまにビーニングに!？」

「かぎかつこが『』から」に変わったときからだよ。」

「そういう説明の仕方やめてよね!!」

おはようございます。

僕、星河スバルです。

え? 知ってる? そうですか…

てんやわんやで始まってしまっでごめんなさい。

今日は日曜日、花火大会の日なんです。

柄にもなく、昨日は楽しみにしすぎてしまっとなかなか眠れなかったんです。

「なあスバル」

「なに ウォーロック」

この電波生命体、僕のウィザードにして居候のウォーロック、今は何故か人間の姿でいます。

ある日、アマケンで異状がないかという検査をしてもらっているとき、突然雷が落ち、そのせいで人型になれるビーニング・スタイルというモードが生まれてしまったのです。

仕組みはわからないけど食べ物も食べれてそのままエネルギーに変えられるそうです。

まあこれはまた別の話、とにかく今ウォーロックは青い髪でツンツン頭の人相の悪いお兄さんです。

「俺はなんども起こしたんだぜ」

「ああ…うん、ありがとう」

「おふくろも起こしにきたんだぜ」

「え？ そうなの？」

「大吾も起こしにきたんだぜ」

「え？ どうしちゃったの皆？！」

「時間、わかるか？」

僕はハンターを確認した

「えっと…5時、なんだ早いじゃん」

「朝ならな…」

「……………」

僕は素早くベッドに昇り窓の外を見た。

雲は細くたなびいている。

太陽は顔を隠したがっているように沈んでゆく。

淡い茜色をした夕焼けが僕の顔、そして世界に映っている。

ああ、これが永遠ってものなのか…

夕焼け——……

………！！！！

僕は声にならない叫び声をあげた。

「な、スバル」

「な、な、な、な、な、じゃないよ——！！」

僕はベッドからジャンプし、慌てて部屋から飛び出た。

僕は訂正しなきゃならないようです。

”おはようございます”、ではなく”おそようございます”でした
………。

「おいスバル、教えとくけどな、あいつの周波数が…って たっ
く、慌ただしい奴だぜ」

ウォーロックが何か叫んだようです。

しかし僕には届きませんでした。

この言葉を聞いていたらならば、僕は…はあ。

2..空に溶け込む今日この頃（後書き）

5時まで寝るなスバル君!! 今日には体育祭の代休なのです。地区大会用の台本書きでてんでこ舞いします…（泣

3..事故事故事故…(前書き)

スバミソなんですがね… キャラ崩壊については責任持てませんか
ら！！

3..事故事事故故…

僕は慌ててリビングへむかった。

「お、スバル おそようだな」

「やっと起きたのね」

父さんはテーブルについてお茶を飲んでいる。
母さんは何個か薄い大きな箱を出していた。

「母さん浴衣は!!」

「この中よ」

箱を指さして答えた

「すぐ着れる!?!」

「無理ね」

「なんで!?!」

まさかそんな答えが返ってくるとは思わなかった…。
すると母さんは笑いながらいった。

「寝汗、ひどいわよ」

「あ、」

別段僕が汗っかき、という訳でもないけれど、確かに服がビショビショだった。

「お風呂、沸いてるわよ」

「ありがとう！」

僕はお風呂にダッシュした。

「あのーあかねさん、今お風呂は…」

「あ、そういえば」

「私とめてきま…」

「いいのいいの」

「あ、あかねさん!!」

「このままだったらスバル、責任もんだな」

「大吾さんまで…」

「いやー娘ができるってのはいいな」

「そうね大吾さん♪」

「……………似た者夫婦ってこのことなのね…」

そんな話をしているなんて僕は知る由もありませんでした。

僕は半分脱ぎながら廊下を走る。

風呂場への道のりがいやに長く感じられる。

気のせいだろうか……

いや、これは暗示だったのかも知れません。
ええ、

ここまでくると先が読めている方がいるかも知れませんね。
ですが僕は知らなかったんです。
予知する力なんてありませんから……。

風呂場の戸ガラッと勢いよく開けた。

とたん

普段風呂場ではみることのない綺麗な赤色が目に飛び込んできた。

僕は固まった。

赤色の彼女も……

しかし視線はお約束、

タオルを巻いていたのが唯一の救い。

艶やかに光る濡れた赤髪がなんともいえず、あらわになっている薄
ピンク色の肌からは目を離すことができなかった。

とうの彼女も突然乱入してきた上半身裸の男からある意味条件反射的に視線を反らせなかったようだ。

……………

……………

「す、スバル君の…………… 変態〜〜!!」

バコーン

赤色の彼女は僕に目掛けて着替えの入ったカゴを投げ、風呂場から追い出した。

こうされても当然だけども、事故なんだよ…

僕は頭に被っているカゴと服をとる。

そして見る。

これって……………

……………

「み、ミソラちゃん……………」

「スバル君……………返して／／／」

「うん…／＼／」

僕は中を見ないように手渡した。

気まずい空気が流れてる……………

3..事故事故事故…（後書き）

……個人的に際どいです あえて年齢設定をしていません 大吾さん達と話していたのは誰か…お分かりですか？

4.:白とお風呂と発覚と(前書き)

スゝバル君がゝへゝんたいだゝ

4..白とお風呂と発覚と

ブクブクブク……………

僕は無事湯舟に浸かっています。

追い出されてから5分後…

ガラッ

ミソラちゃんがでてきた。

「あ、あのミソラちゃん…」

僕は何かを弁解しなければいけないと思いつさに呼び止めた。

すると…

「お先に、スバル君♪」

どんな星でも霞むような笑顔をむけられてしまった。

僕は再び固まりました。

色んな意味で…

ミソラちゃん的にはなかったことにしてるのか、

それとも僕に気をつかってくれているのか…
少なくとも、今は運よく”白い”ようです。

ブクブクブク……

僕は浴槽に顔を浸けたりあげたりしている。

(あれ　僕の前には……)

ブクブクブク……

ザバッ!!

僕は慌てて湯舟から飛び出した。

………

ちょっと、白い目で見ないで下さい！
思春期ってこんなものでしょ!?

………。

僕は冷静に近くにあった下着と服を来て風呂場をあとにした。
浴衣を着るのでどうせまた脱ぐのだけど何分ミソラちゃんがいる…
いくら家でもそんな姿で歩き回るなんてことをする勇氣、僕にはありませんでした。

リビングに向かうと父さんが廊下の壁にもたれて立っていた。

「どうしたの？」

「まあ、女の子だからな…」

「そういうこと」

僕は父さんの言った意味を理解した。

何故か横顔が寂しそうに見えました。

「じゃあ僕も待ってるよ」

父さんの横にしゃがみこむ

「なあスバル」

「ん？」

「父さんと母さんは洋式だったんだが…お前はどっち派だ？」

「え？何？トイレの話？」

「いや、家を建てるなら確かに重要な問題だが」

「家？」

妙な話を持ち出してきた父さんを不審そうにみる上げる僕。

「責任、取るんだろ ミソラ君の」

「……………ええ!？」

僕は驚いた。

いや、本当に。

「いやゝ 覗きは男の甲斐性だとしても仮にもミソラ君は国民的アイドル、責任とらないで何をとる 写真か」

「上手くないよ父さん!! てゆうかなんで知ってるのさ!!」

ミソラちゃんが言った？

まさか。

僕と彼女は長い付き合い、ミソラちゃんのオーラが白いのは確かだった。

そのとき僕は初めて両親（多分母さんもだから）から嵌められたのだと確信しました…

「娘が欲しい、これは全世界の父親の夢だ!!」

「僕は!？」

「息子を持つのもまた夢だ!!」

訳のわからないことを主張しだした父さん…

僕は普段尊敬している父にじとじとした視線を送りながらツツコんだ

「……………ならつくればよかったじゃ、グハッ

「ストップスバル：それはいつちやあいけないな」

父さんの手が僕の口を覆った。

ジタバタするが流石に敵わない。

「ほうはんふあ ひふあへえふあんふあなひふあ！！（父さんが言
わせたんじゃないか！！）」

「いや待てよ 二人目：悪くないかもしれな
「大吾さん！！」」

突然女性が父さんの名を呼んだ。

「わ、なんだ驚いたな ハープか」

「もう：まだ明るいうちにそんな話しないでください！！」

眉をひそめて悪戯っ子を叱る保育士さんのように怒っている。

「ははは わかったよ 暗くなってからするよ」

「あの、そういう意味でも：」

まさかの回答に戸惑っているようだ。

「冗談だよ さうて 未来の娘の着物姿でも拝んでこようかな
ははは」

そう笑いながらリビングへ向かった父さん。

「・・・はあ　ゴメンなさいね　スバル君」

「どうしてハープが謝るの？」

「私じゃあの夫婦を止められないのよ」

「そういうことか」

「ほんと・・・」

本当に申し訳なさそうにうなだれている。

どうして僕が彼女を怒れようか。

というか微塵も悪くないよ・・・

「気にしないでよ　君は悪くないんだしさ　それより、似合ってるよ」

「え？　あら　ありがとう　茜さんが貸してくれたの／＼」

「よく映ってるよ」

このハープと呼ばれた女性はミソラちゃんのウィザード。

本来は豎琴のような形をしているのですが今は人型になっています。
ウォーロックがビーニング・スタイルを得た日、彼女も同じように
アマケンにいたのです。

よって彼女もまた人の姿になる能力を得たのです。

ハープは澄んだ水色の髪で右の頬あたりの髪には朱色の炎のような色をした部分があります。

眼はつり気味で大人の女性を思わせますが微笑んだ時の彼女はなんというか、僕から見ても幼く見え、いたずらっぽそうなあどけない表情をみせてくれます。

人型の時、普段は上でまとめている髪を下ろしており、それが薄紫を基調にした浴衣によく映えています。

「ありがとうスバル君　でも　そういうことはミソラにいつてあげて」

「あ、え、あ、うん…わかった」

意地悪そうに、だが決してこちらが不愉快にはならない笑顔を僕に向けた。

地球に生まれていたら、きっと周りは放っておかないだろう。どうしてウォーロックはこれでハープになびかないんだろうか……

僕等はリビングへ向う

一時は気まずい空気になったがそんなことは置いておこう

僕は彼女の姿をみるのが楽しみでならない。

どんな服でも似合う彼女、でも浴衣姿を見るのは初めてなのです。

（ミソラちゃんの浴衣姿・・・平常心だ　平常心！！）

邪念を払うために両頬を二回叩く
僕は扉を開いた

・・・今日の僕はただみとれるしかできないのかもしれない

4.:白とお風呂と発覚と（後書き）

ちよ、大吾さん！！うちの星河家は変人です。でも皆”素”だと思っています。擬人化ハープが出てきました。もしうちの擬人化姿がみたいという方は木賊奔放日記と検索してみてください。では

5..失言失敗失踪…（前書き）

毎度のことながらギャグテイストが強いです。生暖かい目で見ていると嬉しいです。

5..失言失敗失踪…

トンネルを抜けるとそこは雪ぐn……

違う違う

すみません

危うく名作への扉を開くところでした

扉をあけると

そこには………

「あ、スバル君 どうかな？」

なんとも言えないくらいかわいらしく、それでいて美しい少女の姿がありました。

薄緑色の生地に簡単に言うところ薄い数色の水玉の模様がついていて大人しく調っている。

いつものカジュアルな服とはまた違うよさを引き出している。

どんな服でも似合う彼女だがその魅力がまた違う形で表現されているようだ。

案の定、僕はみとれているだけでした。

（ちょっと スバル君）

（わ、何ハープ）

ハープに肘でぐいぐいされた。

(コメント、コメントしてあげてよ)

(え? あ、そっか でも、なんていえばいいの!?)

(さっきの解説を引用して!)

(え? 解説? 何ハープ 君は僕の心が読めるの? 読めるの?!)

(いいからスバル君 ほら ミソラは待ってるのよ)

ミソラちゃんに視線をうつすと確かに期待が籠った眼差しを向けている。

そしてわざとか天然か女優の性^{さが}かは知らないが頬を染めての上目遣い…

「ねえ どおかな スバル君／＼」

更に目うるうるを追加してきた。

上目遣いの極意を完全にマスターしている…響ミソラ、恐ろしいこ…。

なんて冷静に解説してるんですけど内心たじたじで心臓がばっくんばっくんしてます。

いや、

これで何ともならない人はいない。

断言しましょう。

そして僕はわたわたしています。

（ど、どうすればいいんだ僕　なんて言ったら喜んでくれるんだ
しかも父さん達の手前あまりにもキザなことは言いにくい　…い
や二人はそれを期待してるみたいだけど…　どうする僕、単刀直入、
快刀乱麻、言語道断（？）、一言で…お、思いつかない！！）

「スバル君？」

だんだんじれったくなったらしいミソラちゃんは顔を覗きこんで
きた。

でもその行動は僕を悪い方へと導いた。

あ、頭が真っ白になる――。

と、とにかく言わなきゃ

がんばれ僕！……

そして出た咄嗟の一言――

「ゆ、浴衣、可愛いね」

……

………

………

あれ、心なしか空気が凍りついているような気が…

(あゝらら スバルったら)

(いや それはないだろスバル 流石に)

(スバル君……)

あれ？なんか皆の心の声がただもれなんですけど………

(はっ!!)

僕は気付いた

僕がとっさに口に出した言葉…それは

” 浴衣 可愛いね ”

………

だめじゃん!!

浴衣だけ褒めてるよ僕。

せめて

” 浴衣姿のミソラちゃん、可愛いね ”

って言わなきゃならなかったんだ。

で、でもわかってくれるよね。

ミソラちゃんなら。

ね、ね？

僕らブラザー、僕ら恋人
わかりあえるよね!!

「スバル君」

「は、はい」

「嬉しいな　そう言ってもらえて」

満面の笑み。

よかった、君には通じたみたいだね。

こんなちっぽけなこと気にしないよね。

流石僕の未来の…って何考えてんだ僕!!

いや　よかったよかった

「って浴衣が言ってるよ」

「……え…」

笑みを絶やさず一瞬にしてオーラを纏ったミソラちゃん。

それはとてもとても……全部言わなくてもいいですよね…

「スバル君なんか……浴衣と付き合っちゃえ!!」

「え~~~~!!!!」

そう捨て台詞をはいて僕を押しつけ2階へ走ったミソラちゃん。

「待ってよミソラちゃん!!」

僕は立ち尽くした。

哑然…

そうまでするか、まい・すいーと…

「スバル…やっちゃったなあ 多分父さんの方が気の利いたこと
いっただろ」

父さんが僕の肩に肘を置いた。

「……なんて？」

「可愛いなミソラ君 君が娘になるなんて感激だな」

「…だしは僕じゃん」

ため息混じりにうなだれた。

「褒め方は人それぞれだぞ、スバル いやーよほど嬉しかったんだ
ろう ほっぺにキスのプレゼントだった」

「え?!」

あ、挨拶みたいなものだね、アメロツパとかの！
君はよくロケにいくもんね。

あれ、なら君は海外に行くたびにキスしてることになるぞ。
え、そんな馬鹿な

「いやミソラ君はそんなこじゃないだろ」

「なんで皆僕の心をことごとく読むの!?!」

「細かいことを気にするな　まあ妬くなよスバル　大丈夫、俺はアカネに一本気だ」

「対象として見えてたの!?!」

ぎりぎりの発言をする父親にびっくり。

「まあ後10年もしたら誰をも掌握する美女に…」

「今のままでも充分だよ!?!」

父さん、危ないよ　光源氏にでもなる気!?!?

「まあスバル　落ち着けて」

「不潔だ!?!」

「いや　そんなこと言われてもな」

「ちよつとからかい過ぎね　大吾さん」

苦笑しながら話しだす母さん

「みたいだな　ははは」

「笑い事じゃないよ父さん…」

弱冠釣り目がちに睨む僕。

「まあなんだ キメるときにキメるのが男だ」

「……………」

「な」

父さんは僕の頭にポン、と手を置いた。

「早くご機嫌治してもらいなさい♪」

母さんは僕の頬を悪戯まじりにつつく。

「う、うん」

僕も2階へあがった。

両親から後押しされるのはなんだか変な感じがした。
あれが後押しだったかはわからないけどね…

5..失言失敗失踪…（後書き）

ミソラちゃん（笑）　こんなことで怒るなよ、つというあなた!!
次次回をお楽しみに（笑）　次回はハプロクです、はい

5. 5：世話焼き×KY！？？（前書き）

こんにちは 今回は擬人ハプロクハプのお話です キャラ崩壊は毎度のことですが…心の準備は良いですか？では、どうぞ！！

5. 5..世話焼き×KYⅡ??

こんにちは 皆さん

私はハープ

お馴染み響ミソラのウィザードよ

今はまあ色々あって人の姿なんだけど

中身はまったく変わってないわ

だけどこの姿の時、感性はちょっと人間よりかしら

そんなことより少し私サイドから話をさせてもらうわね

まあ かくかくしかじか、ミソラはスバル君の部屋に逃走

でも、私も二人ともう長い付き合いよ

こうなることはスバル君の発言から容易に想像できちゃったわ

勿論、ミソラが本気で怒ってないこともわかってるわ

あんなことでムキになるほどお子様じゃないの

ま、普段から我が儘放題だけどね

あ、これ、ミソラには内緒よ

しかし本当、世話やかすんだから

二人とも

私はスバル君の浴衣発言を聞いてすぐに周波数を変えて2階のスバル君の部屋へ向かった

どうしてか、ですって？
簡単よ

彼の部屋には”K I N G O F K Y”こと”雰囲気クラッシュヤ”
”がいるんですもの

私はミソラ達をうまくいかせるためにも”最も邪魔”といえる存在
を廃除するためにむかったのよ

「壁が……ひんやり」

我ながら馬鹿馬鹿しいと思うが夏はやっぱり壁だろう

俺はウォーロック

久しぶりだな

いや、こっちの時間的には久しぶりじゃないんだぜ
おっと　こんなこというとまたスバルの野郎に怒鳴られちまう

「壁が……ひんやり」俺　今幸せかもしれない……」

『何馬鹿なことってんのよ』

「ぎゃ~~~~~!!」

俺は叫んだ

突然壁の周波数が乱れ空間の歪みができそこから手が現れたのだから

「て、敵かこんにゃろ!!」

『落ち着きなさいよ 私よ 私』

「え、え、え、え?」

『少し黙りなさいよ ロック』

「なんだハープか」

俺は声の主を確認したことにより安堵の色をみせる、と

『ちょっとこっちきなさいよ』

『え?ぎゃゝゝ』

伸ばされた手が俺を歪みの中に引き込んだ

「な ちょ やめ…」

俺は人型を維持できる周波数のぎりぎりまで無理矢理下げられ歪みの中を通過させられた
まあ壁を抜けただけみたいだが

『お、も、た、いわねゝあなた』

『ちょっとまって!! 無理矢理下げられたから足の方が』

足の辺りが電波空間に引っ掛かった
ちようどジャングルで動くツタに引っ張られる感じで…わかりにく
いっていうんじゃないねえ!!

『さっさと…でてきなさい、よ!!』

『も、もげる―― わ〜〜!!』

ドスン!!

『……………いった〜… 何すんのよ!!』

『そりゃこっちの台詞だ!!』

『ちよ、ちよっと どきなさいよロック』

『いやまて 暴れるなって!!』

……………えっとだ

俺は無事(?) 壁を抜けた

しかし問題なのは…抜けた後の体勢だ

最近、おふくろとよくテレビをみてる
刑事ドラマだったり、月9の再放送だったり、旅行番組だったり、
昼ドラだったり…………

よってそれ〜なりに人間ってのがわかってきた気がすんだよな〜
これが

だから：

今の体勢の気まずさもわかるようなわからないような：

『へえゝ あなたもそういう考えできるのね』

『いや俺だってそれなりに……ってぎゃゝゝなんで俺の考えてるごと』

『いちいちうるさいわね とにかくおどきなさいよ』

『へいへい……』

俺は渋々のいた

渋々ってなんだ！？

しかし今日は何かが変な気がする……

まあいいか

『まあかくかくしかじかなの』

『へゝ かくかくしかじかかゝゝ……ってわかるか！！』

『とにかくあんたがいたら邪魔なの！！』

『な、なら周波数落としてインビジュアル・モード（人の目ではとにかくみえねえんだ）にすりゃいいだろうが』

『あなた黙れないじゃないの』

『な、何を！ 俺がいつ『ちょっと静かになさい！！』』

頬をぶたれた：親父にもぶたれたことないのに！！
あれ、俺って親父いるのか？？

しかし何故だ

ノリだったら泣くぞ俺

するとミソラがとたとた上がってきてスバルの部屋へ入っていった

『はあ まあとにかく下、いきましょ』

『いやまて なんで俺がでてく必要があんだよ』

『え？』

『いっつもいっつもことあるごとにさ』

この際だから今まで思っていることを聞いてみた

『それはあなたがKY村の住人だからよ』

『いや俺 んな村しらねえぞ』

変な答えが返ってきた：

『馬鹿正直に答えないで あなた馬鹿？』

『馬鹿ってなんだ 馬鹿なって！！』

『私と一緒にじゃ…ご不満??』

『え……………』

『ね、』

『いや…… その……』

なんとなく下からこつちを覗いてきた
なんでかわからねえがたじろいでしまった

『……プッ 本気にしないでよ あなたってホントお馬鹿さん』

『馬鹿って おま、 ハープ!!』

『うふふ 単純〜 単細胞〜』

『”馬鹿” ってことじゃねえか!!』

『よくわかったわね』

『るっせ』

俺はハープをおいかけた

『ストップ、ロック』

突然止まったので勢い余ってぶつかった
ハープは俺をトンと押して壁に背中をはりつかせるようにした

あいつはまるで入場者制限のガードマンみたく手を伸ばし俺を背中
で押した

次に来たのはスバルだった

百面相をしていたように見えたのは俺の気のせいだろうか

『よくできました』

『何がだよ』

『黙ってられたじゃない』

『けっ』

『さあ 降りましょ』

あいつは俺の手を引いた
そして俺は初めて気がついた
いつもとは違う
その訳が

『なあ』

『何?』

『その…いいんじゃないか それ』

『あ…どうも』

素っ気なかった
でも見えたぞ

お前今

笑っただろ

俺は黙って手を引かれていった

5. 5：世話焼き×KYⅡ??（後書き）

如何でしたか？色々な方のお話ではある意味このCPの扱いは自分が先駆けのようです 受け入れられるかは甚だ疑問ですが（笑）
今回意図があってあえて句点を使いませんでした：読みにくかったですか??すみません では読んでいただきありがとうございます！

6.. 僕の懺悔録

僕は今、自分の部屋の前に立っています

.....

「み、ミソラちゃん…」

「……………」

「林檎飴も綿菓子もタコ焼きも焼きソバも買ってあげるから!!」

「……………」

「クレープだって1番おっきいの食べていいから!!」

「……………」

応答なし

僕はへたりこんだ

このお姫様（柄にもないこといってるとわかってるよ…）は焦らし上手でした…

「ね、ミソラちゃん　でてきてよ　謝るからさ」

「なんで謝るの?」

「その　…うまく褒められなくて…」

「いいの　だってこの浴衣、君のために買ったんだもん」

「え！　そうなの！？」

これには驚いた。

”君のため”

君という呼び方は単なる皮肉だろう。

でも：なんで思ってたことを言ってあげられなかったんだろう：
僕のバカバカバカ：

「だから浴衣と付き合っていていいよ」

「なにそれ：」

「あげるから」

卑屈に台詞を放つ彼女に僕は我慢できなくなった。

「何言ってるのさ！　いらないよ！！　だってさ、ミソラちゃんが着て
たから可愛かったんじゃないか」

「：」

「僕が浴衣が可愛いなあって見惚れてたと思う？　そんな訳ないじゃん」

「…」

「君だから僕は可愛いっていえただ…」

僕はドアに頭をコツンとつけてうなだれた

僕は交渉がうまくないらしい…

ミソラちゃん…

キィ〜

突然扉が開いて僕はバランスを崩した

ちょうど四つん這いのように

するとしゃがんだミソラちゃんの顔がすぐ側にきた

「もういいよ スバル君」

「え…」

そこにはきわめて笑顔のミソラちゃんがいた

「怒って…ないの？」

「なんで私が怒るの？？」

「だってあんなに」

「楽しかったよ スバル君の懺悔」

・
・
・。

「な、なにそれ!？」

「えへへ」

「ミソラちゃん!!」

このお姫様はことであろうに僕をおちよくって楽しんでいただけのようです

「…からかったんだねミソラちゃん ひどいや」

「たまには…確かめないとね」

「何をさ」

「私のこと、どう思ってるかってこと」

「今更過ぎるよ」

僕は肩の力を落としてため息をついた

その時 — —

「」

「え／＼／＼」

耳元で囁かれた

僕は予想外すぎる言葉に驚きや恥ずかしさを隠せなかった。
きつと今日見た夕焼けより、僕は赤に染まっていることでしょう。

「行こう スバル君♪」

「み、ミソラちゃん！」

「リング飴も綿菓子も焼きそばもたこ焼きもクレープの特大も買ってくれるんでしょ？」

彼女は笑って階段を降りていった

「お祭りだよー スバル君！」

なんとも愛らしく僕を呼ぶ

ああ 僕も浴衣に着替えなきゃ

6..僕の懺悔録（後書き）

プロローグの次に短いです。やっと花火大会にいつてくれそうです。でもジャック君達の性格分らないのです…。シドウさんもティア先生もだしたいですけど口調がわからず…。でも1番問題なのが”他のウィザード達を出すか”なのです…。まあいいようにやってみます。ミソラちゃんの台詞が気になる？ご想像にお任せします。しつこい！！と言われなければこの話はミソラちゃんサイドでも書こうと思っておりますが…。それでは、読んで下さってありがとうございます！！！！

M 6 :: 私の弄り録 (前書き)

6のミソラちゃんサイドのお話です。ではどうぞ。

M 6 :: 私の弄り録

私は今、スバル君の部屋の中にいます

.....

「み、ミソラちゃん…」

「……………」

「林檎飴も綿菓子もタコ焼きも焼きソバも買ってあげるから!!」

「……………」

「クレープだって1番おっきいの食べていいから!!」

「……………」

さっきからスバル君が懸命に私のご機嫌とりをしようとしています。

私は必死になっている彼とは裏腹に悪戯に成功した子供のようにクスクスと笑っています。

私の演技が上手いのか、はたまた彼が騙されやすいのか。でも悪い気はしないの。

「ね、ミソラちゃん　でてきてよ　謝るからさ」

「なんで謝るの？」

「その …うまく褒められなくて…」

「いいの だってこの浴衣、君のために買ったんだもん」

「え！ そうなの！？」

畳み掛けてみた。

”君のため”

なあんて白々しいけど。

でも嘘じゃないんだから。

収録の合間に電波変換してお店を往復。

簡単に決められなくて何度も何度も行ったりきたり。

どれが似合うかな――

どれ着たらスバル君、可愛いっていつてくれるかな――

だから少し意地悪してみたの。

悩みに悩んだものだから。

言いたいことはわかってたけど。

怒ってないよ。

だけでも少しだけ、我が儘にさせてよ。

「だから浴衣と付き合っているよ」

「なにそれ…」

「あげるから」

こういふと彼の声が途絶えた。

流石に純朴なスバル君にはこれ以上は駄目だね。

私はドアノブに手をかけようとした。

「…………何言ってるのさ！　いらないよ！！　だつてさ、ミソラちゃんが着てたから可愛かったんじゃないか」

「…」

「僕が浴衣が可愛いなあって見惚れてたと思う？　そんな訳ないじゃん」

「…」

「君だから僕は可愛いっていえたんだけ…」

彼はドアに頭をコツンとつけてうなだれたようだ。

振動が伝わってきた。

私は…

滅多に聞けない彼の素直な言葉。

何故かな、目頭が熱い…

それより熱いのは頬かもしれない……

キィッ

「わっ」

開くことを予想していなかったのだろう。
突然開いたドアに驚き彼はバランスを崩した。
ちょうど四つん這いのように。

私は彼の頭のあるところくらいしやがんだ。

「もういいよ スバル君」

「え…」

若干潤んだ瞳が私をみた。

「怒って…ないの？」

「なんで私が怒るの??」

「だってあんなに」

「楽しかったよ スバル君の懺悔」

「な、なにそれ!？」

「えへへ」

「ミソラちゃん!!」

怒ったように名前を呼ばれた。

そして私を上眼使いでみて言った。

「…からかったんだねミソラちゃん ひどいや」

「たまには…確かめないとね」

「何をさ」

「私のこと、どう思ってるかってこと」

「今更過ぎるよ」

ため息をついたスバル君

でも女の子にとっては重要なことなんだよ。

ため息ついたそんな君に、もう一つだけ意地悪してあげる。

「知りたいよ だって責任、とってくれるんでしょ スバル君」

「え／＼／＼」

耳元で囁いた。

目をまん丸くしている君がいる。

顔はきつと林檎飴より赤いよ。

こんなこと言うって思わなかったんだよね。

私はクスリと笑った。

「行こう スバル君♪」

「え、み、ミソラちゃん！」

彼をすりぬけて廊下にでる。

「リンゴ飴も綿菓子も焼きそばもたこ焼きもクレープの特大も買ってくれるんでしょう？」

私は笑って階段を降りた。

「お祭りだよー スバル君！」

私は笑顔であなたを呼んだ。

ねえ 楽しませてくれるんですよ、スバル君――

M 6：私の弄り録（後書き）

同じ話を違う人でするとは自分でも思いませんでした…。なら君1
ミソラちゃんサイド
Mをつくればよかったと思う今日この頃です。でも初心者のかせ
にそのようなことをしない方が身のためですよね（アタフタ　で
はお読みいただきありがとうございます！！

7..お代官様(前書き)

タイトルは”??”という感じですがお気になさらず…
ではどうぞ。

7..お代官様

僕は急いで浴衣に着替えた。

男ものは案外簡単に着れます。

僕のは無難に藍色の下地に青色の縦縞模様という浴衣です。

「へえゝ似合うじゃねえかスバル」

「ありがとう、ロック」

「まさに服に着られてるって感じだな！」

「え」

若干顔が引き攣った。

「お馬鹿　せめて馬子にも衣装っていいなさいよ!!」

爽快にツツコミをいれたハープ。

しかしフォローになっていない。

「ハープ、どっちでもけなされてるんだけど」

「違うの　せめてボケるなら王道でボケて欲しいの　でないと大変なの、ツツコミ」

「そ、そう」

ハープの願いは切実でした。

「でも、中々似合ってるわよ スバル君」

「ありがとう」

ニコツと笑いながら言ってくれた。

「俺も褒めたじゃねえか！」

「だから!!!」

何故か夫婦漫才ばりに会話を展開していく二人。
僕はそれを笑ってみていた。

「で、ミソラ 感想いってあげないの？」

ハープが突然話をふった。

因みに今ウォーロックの両頬を抓っている。

「え、うん」

ミソラちゃんは、というと……

何やら真剣な眼差しを僕に向けていた。

眉をひそめて目が三角だ。

刺すような視線……

気付かないようにしていたのに……

「ねえ、ミソラちゃん」

「なあに」

「視線が…いたいんだけど」

僕は率直に言葉を投げかけた。

「……………あ　ごめん　考え事してた」

三角だった目がノーマルに戻る。

「僕の姿がご不満で？」

「いや寧ろご満悦かな」

「そ、そりゃどうも（どういう意味!?!）」

「うん、男の子の帯の方が長いんだね」

「え? まあ細いしね」

うんうんと頷く彼女。

「どうしたのさミソラちゃん」

「いや別に」

「気になるよ」

「言っても…いいの」

「え……」

今度は何を言い出す気なんですか……響さん。
しかし聞いてしまったのは僕。
後戻りはできない……

「う、うん」

「えつとね」

えつとね——

「お代官様、つてのができないかなあつて スバル君で♪」

•
•
•
•
•
•

「へ、へえ」お代官様
な～んだびっくりしちゃったなあ
…
「ってええ?！」

「いや したいなあ っ て」

「待ってよ！普通は僕の方が…じゃなくて何考えてるのさ！！」

「だから聞きたい？　つてきいたんじゃん」

「それもそうだけど!!」

「したいならさせてあげるよ」スバル君

「な、
ななな」

「いいなら私が先に!!」

「わ、わゝゝゝ!!」

帯に手をかけられそうになった。

が、

「ミソラゝ 冗談はそれくらいにしたげなさいよ」

「なあにハープ 今面白いとこなんだけど♪」

「それはあなたの顔をみてたらわかるわ でも世の中動かせないものがあるんじゃない?」

僕等二人にクエスチョンマークが上がった。

それを見兼ねてハープはリビングの壁の方、基…

「時間よ時間」

「「え」」

時計を指していた。

長針は6の一步手前、短針は11を示していた。

只今5時55分…

ウェーブライナー乗り場集合は…6時

「「い、行ってくる!!」」

僕は荷物をひつつかんで風の如くに飛び出した。

「もう、ミソラちゃんがふぎけるからいけないんだ！」

「何よりスバル君が寝太郎もびっくりのねぼすけ君だったからじゃない」

「起こしにきてくれればよかったのに!!」

「何? お目覚めのキスが御所望だったn」早くいこうかミソラちゃん!!」

僕はミソラちゃんの手を握った。

さあ 花火大会へ行こう。

————

「なあハープ」

「何よ」

「お代官様ってなんだ」

「: どういえばいいかしら?」

「やってみせてくれよ」

「……桜吹雪のやつよ」

「おおあれか!!」

「……………」

こんな光景を星河夫妻は笑ってみていたらしい。

7..お代官様（後書き）

待って下さっていた方もそうでない方もお久しぶりです。

リアルが大変でした：まさに怒涛の日々でした。

まあ自分のことはさておき、

……うちのスバミソは異常ですね（笑）

原作のつつしまやかなミソちゃん好きさんに顰蹙を買いそうです

（アタフタ

お代官様はよく時代劇にあった町娘とお代官様のシーンの

”あゝれゝゝ（グルグル）”

というやつです

中々花火大会に行ってくれませんか…

では長々と失礼いたしました。

8..セーフ↓アウト↓セーフ

「遅いじゃない、スバル君、ミソラちゃん!!」

着いた早々、委員長の怒鳴り声が耳をつく。

「ま、間に合ったんだからいいじゃない」

「ごめんね、ルナちゃん」

「ミソラちゃんはいいわ」

「え、なんでさ」

「どーせスバル君の仕度が遅かったんでしょ　いっそ集合をスバル君家にするべきだったわ」

「確かに僕の準備も遅かったけどミソラちゃんが」

「言い訳無用よ!!　集合は10分前が基本なんだからね!」

「…う、うん」

「乗り遅れたらどうする気なの!!」

「わ、わかったよ…ごめんなさい」

一つ言っておきたいことがあります。

ウェーブライナーは6時10分に発進するのです…

いや、わかってもらえたらいいんです、はあ…

「まあまあ委員長、間に合うんだからいいじゃない」

「そうだぜ ゴン太達だってまだなんだからな」

ツカサ君とジャックだ。

「わー、二人とも似合ってる！ジャック君は勘平さんなんだ」

「ありがとう、ミソラちゃん」

「浴衣、着ただけだな どうもスースーしちまって…」

「二人ともかっこいいよ」

「そうか、サンキュー」

「スバル君だって似合ってるじゃない」

ツカサ君は碧色の生地に紺色の模様が入っている

落ち着いた色合いはまるでツカサ君自身の人柄を表しているようだ

そしてジャック

黒色の勘平、というところは普通なのだけれど…背中には、なんだろう、

鳳凰が飛んでいるかのような絵が描かれている…

まさに漆黒に灼熱の炎を纏うジャック・コーウ・アス

似合いすぎだよ、ジャック…

「ありがとう」

「スバル君…」

「なに？委員長」

「コホン」

「風邪？大丈夫？？」

ピキ

あれ、青筋がみえた気が…

「ちょっとスバル君！！」

「い、いたたたたた！！」

ミソラちゃんが僕の耳をおもいつきり引っ張った。

（スバル君の馬鹿！）

耳元で怒ったように囁やかれた。

（何？！僕何したの）

（ルナちゃんは女の子なんだよ）

（男には見えないよ）

ため息一つ

(ダメだってスバル君 女の子は好きな人から褒められたいものなんだよ)

(…委員長が恋してるのはロックマンにだよ)

(つべこべ言わないの)

(…ミソラちゃんはいいの?)

(私は恋する女の子の味方だから!)

……色々とこんがらがってきた。

百歩譲って委員長が僕のことを好きだとしよう。

それを僕の彼女の君が応援するの!?

信じてるからなの?

それとも素なの?

変なところで鈍感なんだから…

(ほら♪)

よく少女漫画でみかける告白しようとする女の子を後押しするお節介な親友のようだ。

はあ

「い、委員長、すっごくいいと思うよ 浴衣も似合うんだね」

「ありがとう　…べ、別にあなたに言われたって嬉しくないんだから／＼／だって私が好きなのはロックマン様なんだからね！！」

「わ、わかってるよ」

ミソラちゃん、君の見立ては違ってると思うんだけど…

しかし”似合う”という言葉に嘘はない。

いつもはドリー…二つくりになっているのをおろした髪。

藍色でところどころに花がちりばめられた浴衣。

コントラストが対象で美しく、お嬢様特有の気品を備えた彼女は純粹に綺麗だと思った。

黙っていれば…なあってね。

僕の彼女は満足気に見ている。

何がそんなに嬉しいの…

他愛のない雑談をして僕らは時間をつぶしていた

するとやっと

「委員長、みんな　す、すまねえ」

「すみません皆さん」

焦げ茶色の浴衣を着た大柄の男の子とそれと対象的に井形紋様のはいった薄い水色の浴衣を着た小さな男の子が走ってきた。

そして同時にウェーブライナーも。

きつと車内で委員長が怒鳴るんだろうね。

8..セーフ↓アウト↓セーフ（後書き）

最近ジャツ君が好きです。

ミソラちゃん、変なところで又けてますね（笑）

ではでは

9..視線↓大混乱

ここはエニシタウンー
歴史が息づく古き街ー

僕らはウェーブライナーに20分程揺られ到着した。

ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー

車内では案の定、委員長が遅れてきたゴン太達を叱りつけた。

でも僕に対してより弱冠優しかった気がする。

肩を萎めるとツカサ君が僕の肩に手をのせてニッコリと笑った。

何か状況がかわったかと聞かれると…

「スバル君これつけて」

「僕が？」

「スバル君につけるんじゃないよ」

「そりゃもちろん」

ミソラちゃんが示していたのは橙色の紐状のリボン

………

僕に髪を結べと？

しかしミソラちゃん、
リボンを口にくわえて渡そうとしないでよ。
髪を両手で持っているからわからなくはないけどさ…

僕は渋々リボンを取った。

「じゃ、よろしく♪」

「え」

ちょ、響さん。

何故にちょこんと座りますかな、
膝に！！

「ほら、早く！」

いやそういわれましても…
女の子の髪を結ぶなんて…

ポン

ツカサ君が僕の肩に手をのせてニツコリと笑った

楽しんでるね、君。

しかしルンルン気分の彼女をいつまでも待たせるわけにはいかない。
何故これだけのことに一大決心をしているのか自分でもわからない
が僕は彼女の赤い髪に手を…

「な、に、をしているのかしら ミソラちゃん」
委員長が僕らの前に般若を背負って御登場…

「え スバル君に髪を「なんでわざわざ膝の上に乗っているのか、し、ら」

「そこに膝があったから♪」

「名登山家みたいなこといわないでちょうだい」

ライナー内で静かに声を張り上げる委員長。
物おじしないミソラちゃん。

僕はただガタガタ震えていたが…ふと周りの視線に気付いた。

僕がバカップル並に女の子を膝に乗せているから？

否、その視線はまさに…

でもまだ人々には確信がないのだろう。

ひそひそと話し声がするだけにとどまっている。

キザマロやジャック、ツカサ君もうすす気付いているらしい。
わからないのはゴン太だけ……

しかし周りは半信半疑、

大丈夫、うまくやっていける。

あとは委員長が禁句ワードをユースしなければ…

「ミソラちゃん！大体あなたは自覚が足りないのよ！あなたは国民的アイドルなのy「委員長だめ！！」」

「何してるのスバル君！！」

「いやこれはちがくて！」

委員長の禁句ワードをとめる拍子にミソラちゃんに抱きついた。
まあこれはおいておいて……
もうだめだ…

「み、ミソラちゃんですか？」

「響ミソラちゃんですよね？？」

「え、あ、はい、うん」

「やっぱり！！」

「すごい」

「ライブいつもってます！！」

「握手して下さい！！！！」

「サインして下さい！！！！！！」

「え、えっと、順番でお願いしまゝす」

怒涛の如く押し寄せる人々。

僕等は一瞬のうちにミソラちゃんのファンの人達に囲まれた。
委員長はしまった・・・、というような顔をしている。

ミソラちゃんは慣れているようでファンに笑顔で対応している。

しかし、いっこうに僕の膝からおりようとはしなかった・・・

ミソラちゃんが膝に乗っているせいか僕までがじろじろと見られてしまう。

もしこれで僕とミソラちゃんがつ、付き合っているということがばれてしまったら・・・。

でもこの心配は無用でした

なぜなら

「君って、星河スバル君？」

「え・・・」

「そうだ、君、ロックマンの人だ！」

「ロックマン！？君がああのヒーロー？！」

「僕大ファンです。ロックマンに憧れてます！」

「握手して下さい！！！」

「サインして下さい！！！」

・・・最近平和すぎて忘れていました。

僕は地球を三度も救ってしまった蒼い英雄でした。

自分で言うとは恥ずかしいですね。

・・・
というわけで僕もミソラちゃんと同じ様な目にあってしまいました・

何か状況が変わったか、

答えはここエニシタウンの花火大会にロックマンと響ミソラがいる
という噂が立ちこめたということでした。

9..視線↓大混乱(後書き)

お久しぶりです。

最近はテストやら演劇やら風邪やらでめっきりまいていました里子です。

書けなかった専らの原因は演劇の台本を手がけていたことです、はい。

11月8日に県大会があるので必死に書いてました。
よってこちらも再開ですw

い、いつの間にかお気に入りにして下さってる方々がΣ(○ユ○)
こんな亀足君の小説を気に入って下さるとは感謝感激雨あられです
(泣)

よく僕はゲームをしていないと主張します。

今回も主張しておきます。

ウェーブライナーの中がわからない!!

バス?路面電車??

そもそもウェーブライナーってなんd(才前ソリャネエワ

結構真面目に言っています(汗

とりあえずこの小説、または僕の作品を読む上で念頭においていた
だきたいのは、

ゲームをしていない!!世界観を知らない
ということです。

世界観が合っていれば「お、こいつやるじゃん」

間違っていれば

「よう考えたのう」

と思っていただければ幸いです。

ではでは

長らくお付き合い下さり誠に有難う御座いました。

10 “キズナ”は“二人”を救う! (?) (前書き)

タイトルは24時〇テレビを文字っただけです (笑)

10…”キズナ”は”二人”を救う！（？）

ウェーブライナーから降りた僕らは一先ず人目の付かない所へ避難した。

着いたのは雑木林の立ち並ぶ広場。

そして僕らは一息ついた。

「はぁ…委員長のせいだよ」

騒ぎのきっかけをつくった委員長を糾弾せずにはいられなかった。

「あなたがミソラちゃんと所構わずいちゃついていたのが悪いんですよ！！！」

「い、いちゃついていたって…」

見事に返り討ち。

でも”いちゃつく”って…死語だと思うんだけど。

「ま、ご愁傷様、ってことだな、スバル」

いやに明るくジャックが肩に手を置いて言った。

「そんな他人事ひたひたみたいにいわないでよジャック」

「他人事だからな」

……ジャック

どうでもいいけど肩に手を乗せるのが流行ってるの…

「ところで今日コーウ、アスは？ ヒカル君も」

僕は彼等のウィザードの存在がないことに気付いた。

「あ？ ウォーロックもくるところってたからな 置いてきたんだよ 祭がめちゃくちゃになっちまうだろ」

「ははは…」

「ヒカルは乗り気じゃなくてね でもどこかでみてるんじゃないかな？」

「……………」

まああのヒカル君（現在のジェミニスパークB）が喜んでくるわけがない

”どこかでみてる”は少し気になったけれど、ヒカル君のプライドのために敢えて触れないでおこうと思う。

「しかしどうするんですか、皆さん」

キザマロが眼鏡の縁をクイッとあげながら切り出した。

「どうする、って何をだ？」

ゴン太がクエスチョンマークを浮かべて聞いた。

「ゴン太君、この状況以外に何があるっていうんです！」

「なんかまずいのか？」

「ミソラちゃんやスバル君がいるという噂が流れてしまって二人とも身動きできないってことですよ！！」

「どうしてだ？くたびれてんのかスバル、ミソラちゃん」

「だ〜か〜ら〜二人が見つかったらファンが押し寄せてしまうということですよ」

「あ、そうか！！」

「ですから現状を打破する方法を」

「いいよキザマロ君」

「み、ミソラちゃん」

「皆で楽しんできてよ スバル君といえるからさ」

「そうだね、皆楽しんできてよ」

もはやこの手が1番だろうと僕も思った。

ミソラちゃんを見た。

笑っていた。

でも、笑顔のときはいつもあがっている眉が心なしか下がっている気がした。

遊びたかったよね、
ミソラちゃん。

皆言葉を発せられないでいた。

「…二人だけ置いてなんていけないわ」

沈黙を破ったのは委員長だった。

「こうなったら皆、二人が『ファンに見つからず花火を楽しむ』ってレゾンを作って達成するわよ!!!」

「しかし委員長、それは無理なのは…」

「問答無用よ! お祭りは皆で楽しむもの そうでしょ!!!」

「そうだね、委員長やろうよ」

「うおお! それいいな委員長!」

「俺も祭って初めてだしよ」江戸の祭は天下の回しもの”ってんだろ なら楽しもうぜスバル、ミソラ」

「…僕だって皆で楽しみたいですよ やりましょう こうなったら！」

威勢のいい声が次々に上がった。

「みんな…」

「いいわねスバル君、ミソラちゃん 皆でお祭りを楽しむのよ」

「ルナちゃん…うん、ありがとう!!」

「スバル君もいいこと?」

「う、うん ありがとう」

「もし見つかりでもしたら…今度の日曜日、ロックマン様の姿で買い物に付き合いなさい」

「え!? 僕だけペナルティ付k 「いいよルナちゃん、レンタルさせちゃう♪」

「ミソラちゃん!!」

このやりとりに皆が吹き出した。
いつもの僕等だ。

改めて”友達”、基”キズナ”の力はすごくて、あったかいものだ
と思えた。

「で、問題は方法よ」

委員長はコホンと咳払いをして本題を切り出した。

「電波変換したらいいんじゃないのか？」

「ゴン太君、ミソラちゃんがハープ・ノート、ということはごく一部のしか知りませんがスバル君が電波変換しても意味がないじゃないですか！」

「あ、そうか…」

「無難に変装したらどうなんだよ」

「今日は何も持っていないよ…」

「どうしたらいいのかしら…」

意気消沈。

僕等は途方にくれていた。

そのとき

「面白そうなことでんじゃねえか 俺もまぜてくれよ」

雑木林から白い浴衣に紺色の帯の目付きの悪い男性、その後から水色の髪をした女性が現れた。

10..”キズナ”は”二人”を救う！(？) (後書き)

お久しぶりです。

投稿する度にお久しぶりですと言ってるような気がしている里子です。

個人的なことを述べますと、8日に演劇の県大会がありました。

一応中国大会出場校に選ばれました！

よってまたまた更新はカメになります・・・楽しみにしてて下さっている方が万が一いらっしやいましたら・・・ごめんなさい。

では小説本文に

レゾンってなんだ、レゾンって。

概念的には理解しているつもりなのですが・・・使い方合っているのかはなはだ疑問です。

どうやって二人がファンから逃れるか・・・

自分ワールドが炸裂します！

ゲーム知らないって言うのはある意味武器です(笑)

これはおかしすぎるだろ！！というご意見がありましたらまた新たな展開を考えます！

というか擬人化の時点でおかしいだろ！！って言う声があがるの覚悟してますが(アワアワ

次回からは世にも珍しいハプロクハプ中心話が2，3話続く予定です。

時間を戻さなきゃならないのですが・・・混乱がおこらないようには頑張ります！

では
お読みいただきありがとうございました！

10. 2..再来!! 御代官様(前書き)

タイトルの意味がわからなければ7を見るのをオススメしますw

10. 2..再来!! 御代官様

時は遡ること30分――

スバル君とミソラちゃんが出掛けていった後、
星河家がどうなっていたのかというと――

「お袋く俺も着てえ」

ソファーの手を置く場所に顎を乗せてキッチンの流しにいるあかね
さんにねだっているウォーロック。

それを見てふふふと笑って答えるあかねさん。

「そうねえ、大吾さんのならあるけど、どうする?」

「しっかたねえなあ　我慢してやるぜ」

猫が仰向けでゴロゴロするような体勢で手置場から頭をズズズとず
り落とす。

「そんなこという奴には貸さないぞ、ウォーロック」

「冗談だって、そういうなよ大吾」

くるっと向きを変え、わははと言いながら大吾さんへと応答する。

「ロック君、スバル達をみて羨ましくなっちゃった？」

手を拭きながら浴衣を置いてある部屋へ行こうとしたあかねさんがニコニコしながら聞いた。

「いやな、”羨ましい” っつうより俺は”御代官様” ってのがしてみたいんだ」

「ぶふっ!!」

傍らでお茶を飲んでいたハープはおかしなワードが耳に入って吹き出した。

「時代劇好きの俺様にとってこれは知らなきゃいけないことだろ」

「それならハープちゃんが着てるから問題ないんじゃない?」 「あかねさん!!!!!! 変なこと言わないで下さい!!!!」

ゲホゲホ噎せながら反抗するハープ。そのハープの背中を摩ってやってる大吾さん。

「フフ、そんなにムキにならないで」

「ムキになりますよ!!! なら私が責任をもってロックに御代官様します!!!!」

「え?」

周りが静寂に満ちた。

「…………あ／＼／」

顔からボンツと火が出たように真っ赤っ赤。

無意識のうちに妙な言葉を発してしまっただけ。
相当混乱していたようだ。

あかねさんと大吾さんは……………爆笑している。

「ぎやはははは は、ハープ、そういう話は…はは、夜するもんじや、ヌフ、なかったのか、グフふっ」

テーブルが可哀相になるくらいバンバン叩いて涙を流して笑いながら喋る大吾さん。
笑い方が相当おかしい。

「だ、大吾さん！！／＼／」
涙目になりながら一喝。

「フフ ロック君、着せてあげる そのあとハープちゃんに存分に御代官様してもらっちゃいなさい、クス」

「だからあかねさん…」

「おう！！」

「おうじゃないわよ！！…………はあ」

（スバル君、この家庭で生きてきたあなたなら…ミソラときつとう

まくやっっていけるわ…)

ハープはこの辺鄙な星河夫妻とミソラちゃんを重ねて見たのでしょうか…

妙な確信を抱いたらしいです。

その時のハープの背後には後光がさしていたとかいなかったとか…

10. 2.. 再来!! 御代官様 (後書き)

お読み頂き誠にありがとうございました!

キャラ崩壊? はて、聞こえませぬなあ (オイ

毎度のことながら笑って許してやってください (汗

10.4 (前書き)

またまたウィザード達の話です。

10.4

「人型の俺ってさ、なんでも似合うよな」

浴衣を着たウォーロックはソファアの肘置きに足を乗せ、親指と人差し指でL字型を作り顎あたりにあてポーズをとっている。

「一人で言ってなさい」

何を思ったかナルシスト発言をしたウォーロックを冷たくあしらうハープ。

「なんだよそれ！」

頬をプクうっと膨らませて怒っている。

「ごめんなさい 謝るからそれやめてちょうだい…」

「は？」

復習しましょう。

現在のウォーロック君の姿は18〜20代の青いツンツン頭で人相の悪い釣り目のお兄さん……

はい、何が言いたいかおわかりですね。

「それよかさゝ は、や、く!！」

「え…」

「御代官様〜!!」

ちびっ子がまるで

” 肩車〜”

とでも言うように言っている。

漫画ならば一瞬三頭身になるシーンだ。

「だから…それは時代劇でも見てちょうだい」

「やってくれるっていったじゃねえか」

「だから…」

額に手をあてうなだれ、軽はずみに言った自分の言葉に後悔している。

「布団貸そうかハープ？」

「大吾さんは黙ってて下さい!!」

鬼のような形相とはこのことでしょうか。

「あ、あかね ハープが怖い」

「まだまだね大吾さん からかうなら程よくしないと」

ウォーロックの着付けを終え、一服しているあかねさんが湯飲みをことんと置いて言った。

「あ、あかねさん…」

口角がヒクヒクしている。

引き攣った笑顔が板に付いてきているハープ。

何だか可哀相になってきた。

「なるほど」

「納得しないでください!! はぁ…」

本日何度目のため息だろうか。

幸せが逃げて行くどころか何か大切なものを失ってきているような気もしているハープ…。

（なんで私…こんなにからかわれてるのかしら）

「それは面白いからだ（よ）」

「人の心を読まないで下さい!!」

台本があるかのように声が揃った星河夫妻。

またお腹を抱えて笑い始めた。

（スバル君…ごめんなさい）

ハープはスバルの心を読んだことに今更ながら謝罪をした。でも取り分け謝る必要はない。二人とも顔に出やすい、よって誰一

人として心の中など読んでいないのだから。

「ま、別に御代官様はいいからさ」「だから嫌だって言ってるでしょ!...え?..?」

ウォーロックは眉を潜めて怪訝な表情をみせる。

「.....何いってんだお前」

「いや、その言葉のあやっというか」

突然話が変わったので返答に失敗した。

「やっぱり...したいんじゃないかねえのか?」

「だから違うって言ってるのよ...」

頭をかかえてシュンとしている。
もう突っ込む気力もないようだ。

「そっちはいいからさ、せめて行こうぜ 祭」

「祭... エニシタウについてことかしら?..?」

「おう」

「いいんじゃないハープちゃん 行ってきたら」

「そうだな せっかく浴衣着たんだ いてくるといい」

夫妻も名案だというようにうんうん頷いている。

「でも… こいつと」

「なんだその眼は！」

ハープは露骨に嫌そうな視線を送った。

「なんだよ」

「だってあなた、どうせミソラ達の邪魔する気でしょ」

「……え??」

「なら絶対に行かせない…」

「いや、俺がいつ「いつも」

静かに、けれど熱く言葉を発する。

「ミソラがこの日のためにやっと取ったオフなのよ 3日間ぶっ通しだったのよ いつもはギリギリまで嫌がるような仕事も素直に収録して、数十分の休みを何度も使って電波変換して浴衣選びにいたりしたし、今日の午前だってずっと頑張ってた、なのに… それなのに邪魔しようってのなら…私は絶対にあなたを許さない！」

ハープの周波数が乱れる。周りの歪みをはっきりと目に見え、元の姿に戻ろうとしている。

そのとき、

「何勘違いしてんだよ」

ペシン

「いっ、たうい」

ロックはハープの頭をペシンとはたいた。

「何すんのよ!」

「誰が邪魔するってんだよ」

先程のような行為を働いたことをあたかも当然という顔をしている。

「………」

「俺は祭に誘ってんだぞ」

「だから邪魔しにいくならお断りよ」

「馬鹿かお前は!!」

「何よ KY星人のくせに!」

「は? 誰がんな星出身だ! そもそも”KY”ってなんだ!!」

「あなたみたいな人のことよ」

「一緒に行こうっていうのがそんなにダメなのかよ!!」

「うるさいわ!! 誰があなたなんかと……ええ」

飛び交う会話が一瞬の間に包まれる。

「お前……行きたいんだろ、実は」

「私?？」

「行きたいんだろ」

ウォーロックから意外な言葉がでてきた。

ミソラが今日の日のために頑張ってきたことを知っている自分。

ミソラの口から一緒に行こうという台詞がでない訳がない。

しかし彼女が誘いに応じなかったその理由、いつも忙しいミソラにスバル達同年代の友達と普通の時間を享受してもらいたかったから…

「私は……」

ハープは言葉を、気持ちを迷う。

しかし先に言葉を紡いだのは彼の方だった。

「なら…黙ってついてこいよ」

「え?」

「俺様が行きたいってことにしてやる だからこい!!」

「な、何勝手なこと言ってるのよ」

「邪魔しにいくんじゃないねえ 俺達の時間は俺達のもんだ だから、さ」

「……………」

言い返せない。

いや、言い返す必要がなかったのかもしれない。
そして彼はこう続けた。

「に、似合ってたんだからよ、浴衣 行こうぜ」

恥ずかしげに髪をぐしゃつと掻き、強面を綻ばせ無邪気に笑いかけ、手を差し延べた。

「……………し、しかたないわね そんなにいうなら…ついていってあげるわよ」

彼女も眼さえ合わせなかったがそれに応じて手を添えた。
強気な言葉とは裏腹に、顔はこれでもかというくらい赤い。
しかしどことなく、幸せそうな笑みが見えた気がする。

パチパチパチパチ

突然拍手が聞こえた。

「いやゝ ロックもなかなかやるようになったなあ 80点だ」

「でもまだ伸びしろはあると思うわ 期待を込めて60点!」

「お、厳しいなあ」

軽快な笑い声とともに空気がかかった。

お忘れかもしれないですが……ずっといました星河夫妻。
すっかり忘れていたロックとハープ……

「大吾!!」

「なんだKY星人」

「その名で呼ぶな!!」

「楽しんでらっしゃいね、ハープちゃん」

「あかねさん……」

星河夫妻の発言に怒るロックにたじろぐハープ。

大吾さんはロックをあしらいながら言った。

「ほらほら、ウェーブロードを通っても結構かかると思うぞ」

「ウェーブライナーは2、30分だけどね」

「お、おう」

「ここからちようど真っ直ぐ西を目指すとエニシタウンだ　町並みがいきなりかわるからよくわかると思うが」

「多分大丈夫です　ミソラの撮影で一度だけだけど、いったことがあるので」

「そりゃぁいい　お、そうだロック」

「んあ?？」

大吾さんはウォーロックの肩に手をかけひそひそと話しかける。

「これやるよ」

「……5000ゼニー?？」

大吾さんは人差し指と中指でお札を一枚挟んでかつこよくだした。

「まあただの縁日だ　そんなに使うこともないだろうからこれで十分だろうよ」

「別にいらねえよ　祭にいくだけだぜ?」

「人間の世界は金がないと身動きできないぞ　出店の魔力は俺も知ってる…」

「そ、そんなに言うなら貰っとくぜ」

そのときの大吾さんは何かを悟っているような顔をしていました。
何があったんですか……

「ま、気にせず…といってもしそくないがとつとけ スバルには倍やったんだ 何せあのミソラ君のスポンサーだからなあ、ははは」

ポンと肩を叩いた。

玄関前

「じゃあ行ってくるぜ」

「気をつけてね」

玄関で下駄に履きかえた二人。
歩きにくいのかハープは少しひよこひよこしている。

「えっと、多分スバル君達と帰ってきます」

下駄をコンコンつと鳴らし、振り向き様に言った。

「朝まで帰ってこなくても父さん怒らないぞ、と伝えといてくれ」

「ぜ～～～ったいにいいません!!」

「冗談だって 気をつけて」

ウィザード達は人型を維持したまま周波数を変えウェーブロードに飛び乗った。

「いやゝ子供達皆、行っちゃったな」

「そうね」

しみじみと話し出す夫妻。

「騒がしかったな」

「楽しんでたでしょ、大吾さん♪」

「これ以上ないくらいな！」

白い歯をみせてニカッと笑った。

「テレビ見ましょ 花火大会、きっと中継するわ」

「よし、気合いいれて皆を探すか!!」

「そうね」

そう答えると、あかねさんは家に入ろうとした。

「……スバルは覚えてるのかな」

エニシタウンの方角を見て大吾さんはぽつりと呟いた。
あかねさんは足を止めて振り返る。

「それはわからないわね でも良い思い出よ」

「まあ、覚えてなくてもいいさ あかね、ビール!!」

「はいはい」

夫妻は楽しく家の中へ入っていった。
太陽はあたりを赤く塗り潰している。
もうすぐ夕焼けも終りそうだ。

10.4 (後書き)

どうも。

やっとういザード達が祭に向かってくれました。

花火が上がるのが来年になりそうな気がしてしやうがありません。

一月になると流星でまた違う、次はバトルもあるものを始めようと目論んでいますから、やっぱり今年中には決着を……。

すごく私事ですが、先日演劇の大会がありまして、うちの学校は中国地方で2番でした。それから僕も念願の創作脚本賞をいただきました。だからといって文章がうまい訳ではありません(汗)とにかく大きなことにかたがついたのでこっちのほうも頑張りたいです。

まだまだ頑張って修業します！

ではではお読みいただきありがとうございました！

10. 5.: 口は災いのなんとやら (前書き)

今までで1番短いものだと思います。

10. 5..口は災いのなんとやら

私達はウェーブロードに乗ってエニシタウンへと向かった。

真っ赤だった夕陽はもう顔を隠していて、淡い朱色と夜の黒紫色が絶妙なバランスで相対している。

口じゃ言い表せないわ。

「お、綺麗だな」

.....

私は驚いてロックをみる。

すると私の視線に気付いて眉をしかめた。

「なんだよ...」

「別に」

「はあ？」

「あなた、変わったわね」

「んだよ、それ」

しみじみと思ってしまったから。
地球に来たから？
人型になったから？

いつから変わったのかしら。

F M 星でも由緒正しき荒くれ者、
そんなあなたが自然をみて

” 綺麗だな ”

なんて…

なんだか不思議なものね……

「お前の方が変わったんじゃないのか」

「私が？」

口を尖んがらせ、いじけたように言うロック。

「昔はウゝアルゴみたいにいけ好かねえ高笑いしてたくせによお」

「高笑い？ウゝアルゴと一緒にしないでよ！！ならあなたはコーウゝ
ゝアスみたいに乱暴者じゃない！！」

「あの野郎と一緒にすんな！！虫ずが走る！！お前こそジェミニ以
上にワンマンプレーだったろうが！！」

「強調性の欠片もないのはあなたでしょ！オックスみたいに突っ走
ってたのは誰！！」

「俺がいつあのカルビみたいにうすのろだったってんだY『お前ら
それくらいにしときやがれよ』」

「「え？」」

『キャハハ　だ・れ・が、いけ好かないって？？』

『ワンマンプレーで悪かったな…』

『ブロロォ〜！誰がカルビでうすのろだって？』

「「コーウゝアス、ウゝアルゴ、ジェミニ、オックス……」」

私達は凍りついた……

10. 5：口は災いのなんとやら（後書き）

お久しぶりです。

ウィザード達を出してみました。

本当に口調がわかりません…

本当に性格がわかりません…

なんてこった。

オックスが1番わからない……

次の話はもうウィザード達の会話という……

違っていたら指摘してやってください（泣）

では、お読みいただき有難うございました。

10. 6..人? ウィザード? ウィザードが人?

嫌な笑い方をする人達、憤りを見せる人、あっさりと言ってみせるも確実に傷付いている人……
実に様々でした。

『ウェーブロードを人間が通ってるから何かと思ったけどお』

『お前らだったとはなロックちゃん、ハープ』

「「あ、あははははは……」

水色の電波体で頭のヘルメットの部分からポニーテールのように出ている電波が特徴のウゝアルゴ、まさにカラスというような黒い電波体のコーウゝアスの二人がまるでカツアゲをする不良のようににじり寄ってきた。

私達はお互い逆方向の斜め下を見て答えた……

『…エニシタウンか?』

「なんで知ってる、オックス」

聞いたのはオックス。闘牛を思わせる赤とオレンジの電波体。

『ゴン太が浴衣を着て花火大会にいったからな』

私達はほおくと驚いた。

だってオックスがこんなに察しがいいとは思ってもみなかったんですもの。

そして私は純粋な疑問が浮かんたのだ。

「あなたたちはついていかなかったの？」

『俺はジャックの奴がコイツ（ウォーロック）と俺と一緒にいると祭が目茶苦茶になるってよ』

『ゴン太は……ブロロオオ————！！……ハンター自体を忘れている……』

ジャック君の考えは正しいと思うわ。懸命な判断ね。オックスの方は……コメントしづらいわ、本当。

「あなたは？ヒカル君」

私は白と黒の二つの御面のような電波体、元は双子座の電波体に投げ掛けた。

『あんな奴らといられねえからよ』

ふんっとそっぽを向いて答えた。

「あらどうして？」

『別に……いいんだよ ツカサが楽しけりゃ』

似合わないことを言ったと思っているのか顔を少し紅くしている。私はそんな彼をみてクスリと笑った。

『あたしはティアについてってたけど……暁がアシッドの奴連れてた

のよ あたしあいつと二人っきりなんてやーよ』

ウゝアルゴがもううんざりと手でジェスチャーして言った。

「『『なんで二人っきりにならなきゃなんないんだ??』』」

「『『空気読みなさいよ（めよ）！このKY軍団』』」

「『『『え!?!?』』』」

疑問を投げ掛けたのがロック、オックス、コーウゝアス。

ツッコミをしたのがハープ、ウゝアルゴ、そしてジェミニ…

皆の視線が一斉にジェミニに集まる。

『あゝ? んだよ』

『別になあ、ロックちゃん』

『別になあ、コーウゝアス君』

『キャ、ハハハハ…』

『ブロロオオ!! 腹でも痛いのかジェミニ!! ならハンターに帰
つたらどうだ!!』

周囲には嫌な感じに静電気が走り青白い光りがみえてきた。
ジェミニの口元がだんだん下が、いいえ、上がっていく…

『デメエーーら……ざけんじゃねえぞ!!!!』

チュドーーーン!!

「「『『ぎゃ—————!!』』」」

私達は辛うじて避けた。

威嚇だったんでしょよ。

でも威力は本物だった……

洒落にならないわ。

その剣幕に過去、残虐という形容詞を意のままにしていた二人も顔が引き攣っている…

こ、これはノイズどころ

じゃ済まないわ………

『ちょ、ちよつと、コーウゝァス なんとかしてよ!!』

『お前が行きゃいいだろ!!』

『あたし”水”!! あいつ苦手なのよ!!』

『俺は空飛ぶから”雷”は面倒臭えんだよ……って、わぁ!!!!』

ヒカル君の2回目の雷が落ちた。

『ガタガタぬかしてんじゃねえ!!!! テメエラ全員ここで御陀仏だよ!!!!』

()()(やばいわ、これ、本当)()()()

ボルテージマックスのヒカル君は電撃の乱射が始まった。
狙いがないだけ避けるのは簡単なんだけど……

「もう俺がいくぜ!!」

ロックが片袖を腕まくりしてヒカル君に向かおうとした。

「ちょっと! ダメよロック!!」

浴衣の袖を掴んで制止した。

同時にロックの変なスイッチも押してしまったらしい……

「その手を離しちゃあ、くれやせんか おハープさん」

(誰よ”おハープ” って!!!!)

「男にゃあ行かなきゃなんねえときがあるんでい……今がそんな時だ
あ 達者でな「何馬鹿なことやってんのよ!!!!!!」」

「ぐはっ!!」

お馬鹿なロックの顎にアッパーをクリーンヒットさせてやった。

浴衣だから…着物だから…袖を引っ張って制止はロックの時代劇
好きのスイッチを押したようです。

「……………何すんだよ!!」

「あんたが黒焦げになろうと灰になろうとそんなことどーでもいい
の!!」

(は、灰……………)

「でもあなたが着てるその浴衣!!」

「……………」

「それが焦げちゃったらどうするの!! 浴衣高いのよ!! 星河家お金持ちなのよ!! 絶対それだって高いんだから!! あなた焦がしちやったらどうするの!!!!」

我ながら貧乏人発言をしたような気がする……あ、でも浴衣は本当に高いんだからね!!

「じゃあどうすんだよ!!」

「待ちなさいよ 考えてるんだから!!」

なんとかしなきゃ……………

何かないの??

ヒカル君が暴走しないように……そうだ!!

「あなたたち!! 耳塞いでなさい!!」

「『『『え?』『』』」

奥の手!!

「あゝあんなところにツカサ君があ!!」

『な!?! なんだ?!?』

焦って周りを見回している。
今よ！

『騙しやがったなハープ』――――
――』

（（（（（ちょ、超高周波音……）））））

私は声にならない音を出した。
技というよりただの大声。

ま、音を司る私だからできるのよ。
聴覚プログラムを攻撃する高音は相手を気絶させることだってできる。

けどそんなことがしたいわけじゃないからMAXより当然セーブしたわ。

ヒカル君はウェーブロードに張り付いてうごうごしている。

「ごめんなさいね、ヒカル君」

『は、ハープてめ……え……』

「あなたに1番効くのはツカサ君だと思ってね、ヒカル君♪」

（（（（（いや、効いたのは絶対お前あんたの声だ（よ））））））

ヒカル君は口をぱくぱくさせている。
言葉を発することを諦めた彼はため息をついた。

『…………ああゝ はいはい やめてやるよ……（またあんなの聞かされたらたまねえしな……） べ、別にツカサがどうかじゃねえからな……』

周りの電気が消えていった。

ウェーブロードの端で小さくなっていた人達も安堵の色を見せる。

『でもお、この漫才コンビが変わるのはわかるけどお、地球人に近くなるところも変わっちゃうのね ねえジェミニ』

「漫才コンビって誰のことかしらゝ ウィア・ル・ゴ」

「俺らのことだろ」

「変に空気読まないでKY」

「はあ!？」

私は青い奴を怒鳴り付けた。

『その”THE 青色” 共と一緒にすんじゃねえよウィアルゴ』

「こいつと一緒にしないで! 私はスカイブルーよ!！」

ヒカル君にツツコンだ。

青いのが「おい」とツツコンでいるみたいだけどヒカル君はスルーして話しだした。

『俺は”ヒカル”だ。でも”ジェミニ”だ。面倒臭えけどよ。ま、

俺はお前達の知ってる奴じゃねえ。だから違うんだろ』

『気持ち悪くないか？そういうの』

『変なこと聞くなオックス 面倒臭えのは面倒臭えんだよ 言っても、俺はあいつのウィザードだしな それなりにやってやんなきゃなんないんだよ、あいつのためにな』

声は投げやり。

でもその顔に幸せの色が見えるのは私だけかしら……

『地球の奴ってのは難儀なもんだなあ。まあジャックの奴がしょげてんのもなんか面白くねえけどよ。』

『ブロオオ！！！同感だ！！元気がなくて牛丼を食べないゴン太はゴン太じゃないいい！！まあそんなことはなかったが……』

皆しみじみと自分のパートナー達を思い浮かべた。
私も同じよ。

悲しい顔をしたミソラを見たくなんてないもの。

「なんだかんだ言ってもテメェらも丸くなってんじゃねえか、なあ
コーウ、アス。なんなら鳥籠で飼われてみるか！」

『あゝあゝ？！お前は犬小屋がお似合いだぜロックちゃん』

「んだとお！！！」

『あたしも人になってみたいなあ』

.....

「「『『『え!?!?』『』『』」」

『何よ』

皆一瞬凍り付いた後絶叫。

『いやあ別に……なあロックちゃん』

「な、なあコーウゝアス」

『ブロロオオ!! 腹でも減ったのかウゝアルゴ!!』

『あ、あんたたちね……』

(ちよ、このKYトリオ…ヒカル君の二の舞じゃない!!)

『いいのおゝそんな失礼なこといつちゃってゝ……』

ウゝアルゴの笑顔にトリオも合わせ皆全身全霊をもって身震いした。

『ま、まあ待ちな、ウゝアルゴ』

「お、おう、そうだぜ(女より怒ると怖いものはねえ!!)」

『ブロオオ…は、話せばわかる!!』

『おい、ノイズがやばくねえか 俺にかましたさっきのやつ一発お見舞いしてやったらどうだハープ』

「え、いや無理よ！耳を塞がれたら効果が殆どないもの！！ちょっとウゝアルゴ、や、やめなさいよ！！」

『もんど〜………むようよ！！』

「「『『ぎ(き)や〜〜〜〜〜〜！！！』』』」

『………なあってね』

「「『『え？？』』』」

茫然……

『キャハハハハハハ ばっかじゃないの〜 私はどっかの雷さんじゃないわよ』

ヒカル君が『るっせえ…』とぼやく。

でもあなたの方が質が悪いわよ、ウゝアルゴ。

「でもホントどうした」

『お前が人型？？ ロックちゃんが羨ましいってか？？』

『別に夫婦漫才コンビがどうかじゃないわよ』

「さりげなく変な言葉付け足さないでちょうだい！！」

『誰かって言われるとやっぱりティアかしらね』

私を無視してウゝアルゴは続ける。

『暁がいいって訳じゃないけど、ティア幸せそうじゃない？でもアタシ、いまいちわかんないのよねえ！幸せってのが だから人になつたらわかるのかなあ！って』

ウゝアルゴはまるで少女のように恥じらいながら話した。
可愛いところあるじゃない！

「良いんじゃないウゝアルゴ！私達は偶然なっちゃったんだけど、私天研に頼んだ『お前が人間？ひやははは！ なってもおかしいだけだぜ！ちゃんちゃらおかしいや！！ははははは！！』」

「ぶふっ 最悪最凶のお前が人間？？あはははは！」

『ブロロロオオ……お真央が！？止した方がいいんじゃないか！ははは』

私の言葉を遮ってKYトリオが笑い始めた。
傍らのヒカル君は呆れてため息をついた。

ウゝアルゴはというと……

『へえ！~~~~ 言いたいこといつてくれたじゃない、コーウゝアス、ウォーロック、オックス……………』

ウゝアルゴは俯いてふるふる震えながら言った……。

私は確信した、ヤバイ、と。

マジのウゝアルゴに対抗できそうなのは……雷属性のヒカル君！！
って、いないし！！

当の三人はウィアルゴの様子にも言葉にも気付かずに笑い続けている。

……………逃げよ。

「あははは、ぐえっ!! 何すんだハープ!!」

「良いから!! じゃ、じゃ、さよなら皆!!」

私はロックの後ろ襟を掴んで全速力でウェーブロードを駆ける。

『お、いっちまいやがった お熱いもんだねえ ひやはははは!!』

『ブロロロオオ!! いうなコーウィアス!! ハープの鉄拳がとんできくるぜ』

『ちげえねえ ひやはははは』

『ハープの前に、アタシの鉄拳がとぶかもねえ コーウィアス、オックス……………』

『『え……………』』

私はその後の二人がどうなるか、見当もつきませんでした。ただ言えるのは夕陽はもう沈んでしまったというだけです……………。

10. 6..人?ウィザード?ウィザードが人? (後書き)

多分最長です、はい。

長い割には1番できが…… (泣)

ウィザードキャラ崩壊もいいところす (泣)

ウィザードの気持ちかわかりませぬ!! ……

ヒカル君がいいこ過ぎる (笑)

ウゝアルゴが乙女過ぎる (笑)

……ははは (泣)

ご指摘、オールウェイズ待ってます (泣)

ウィザード篇はもう少しで終了です。

やっと花火大会に行けます (泣)

ではでは、お読みいただき、ありがとうございました!

超番外編！クリスマスバミソトーキング！？（前書き）

ほぼ会話文のみのギャグ話です。本編とは関係ないので軽い気持ちでどうぞ。。

超番外編！クリスマスバミソトーキング！？

12月24日――

「はい皆さん、メアリーとクリスマス♪」

「ミソラちゃん、それなんか違う（メアリーって誰？？）」

「大丈夫！わかってやってるから♪」

「そ、そうですか（クリスチャンの方への暴挙のような気がするんだけど……）」

「それはさておき、いやークリスマスだねースバル君」

「そうだねーミソラちゃん」

「だけどささー まだ夏休みだ・よ・ね 私達」

「そ、それは言わないでやってよミソラちゃん」

「でもおかしいよ 長編ストーリーならいいよ でも季節物を扱ってるのにこれってどうかと思うよ 私は」

「そもそも始めたのが秋だしね」

「そう でも秋に始まり秋に終わる、なら未だしも………花火すら

上がってないんだよ!! 見通しを立ててないからだめなんだよ!!」

「あははは…… 見通し自体は立ってたらしいよ 台本とまさか4ヶ月間も付き合うと思ってなかったからさ」

「……:ならストックしてから投稿すればよかったのに」

「それは作者の甘い所だね 仕方ないよ 元から落描きしかできない人なんだからさ 許してやってよ」

「うう:」

「ね」

「スバル君がそういうなら:私は別にさ」

「うんうん で、今日はそれでも季節感は大切にしたいなああっていうことで、”超番外編!クリスマスバミソトーキング!!”を作ってみたんだって」

「本当に超番外編だね 君1と全く関係ないよ」

「それは企画した本人もわかってるみたいだよ」

「でもいきなりクリスマスの話題ふられてもな、夏に寒中水泳しろ!って言われるくらい無茶な相談だよ」

「例えがよくわからないよミソラちゃん」

「そうかな?でもどうしよう、スバル君」

「うーん、話題か………クリスマスにしたいこと、とか??」

「スバル君と一夜を過ごすことも「ちょ、やめて!!」そういうの!!
本当にやめて／／／」

「え?何が??」

「だからその、際どい発言はちよつと／／／／／」

「でもクリスマスは遊園地行ったりスピカのイルミネーション見に行ったり、夜中遊べるよ」

「え……… な、なあんだ、そ、そういう意味だったのゝ あ、あはははははは」

「他にどういう意味があるの」

「い、いや、ないないない!!」

「……ははくん スバル君、わかったよ君の考えてることが♪」

「え、あ、な、なんのこと!??」

「いやゝむつつりさんだなあ スバル君はw」

「ち、違うよ／／／考えてないよ!!絶対!!」

「ふーん 君が望むなら夜までだろうと朝までだろうと一緒にいてあげるのにn「ミソラちゃん!!サンタさんから何もらうの!!!!」

「???」

「え、いきなりなn「何が欲しいの!!!!!!」」

「(話題を変えたね...) えっと、私が頼んだのはオルゴールだよ硝子細工がしてあるやつ」

「そ、そう!! 僕は新しく出た電波望遠鏡かな!! うん!! すごいんだよ、本当に!! 性能が違うんだ!! 何が違うかって言うとな性能が違うんだけど性能が上がって性能が良くなって性能が……」

(可愛いなあスバル君は すっごく必死だw)

「……………で、性能が凄いだ!!!!!!」

「よくわかったよスバル君 性能がいいんだね♪」

「う、うん……／＼／＼(誤魔化せた、かな……)」

「ところでスバル君、サンタさんみたことある??」

「え?? うーん、ないかな(サンタって言うてもうちは父さんだしなあ……)」

「私見ちゃったの! 去年!!」

「え!?!」

「驚いちゃダメだよ! 実はね……」

「実は……?」

「サンタさんはね、実は女の子だったんだよ!!」

「……………え?」

「女の子!! 髪は水色!! 私絶対おじいちゃんみたいな人だと思ったのに……………これはメディアもびっくりだよ!!」

（……………それって人型のハープがサンタの格好してたんじゃない?）

「ね、すごいでしょ! 私これからサンタさんはおじいちゃんだ!! 誤解をとくためにテレビ局に行って報道してもらおうよ!!」

「ちょっとそれはだめ!!」

「なんで?」

「えっと……………サンタさんは素性を隠して僕等にプレゼントをくれるわけじゃない?? きっとサンタさん是有名になりたいわけじゃないんだ だからサンタさんのためにも、ミソラちゃんはそのことを君の胸にしまっておくべきなんだよ」

「スバル君……………そっか、そうだね うん 私もう絶対言わないよ サンタさんのために!」

「それがいいよ（ハープ、僕は君の秘密を守ったぞ とうかミソラちゃん…君はなんて純粋なんだ／＼）」

「そうだスバル君、私サンタさんに毎年の御礼に何かしようと思う

んだ 何がいいかな？」

「え……ハープに?？」

「なんでハープがでてくるの?？」

「いや、その（や、やば……）」

「?？」

「いや、ミソラちゃん サンタさんはミソラちゃんが笑顔でいることが1番嬉しくて1番のプレゼントなんじゃないかな」

「そうかな」

「そうだとも！だからミソラちゃんは幸せじゃなきゃ、ね」

「……じゃあスバル君も手伝ってね♪」

「……え?？」

「私の幸せはスバル君が幸せでいることだから 大好きなあなたの幸せが私の幸せなの」

「み、ミソラちゃん……／／／」

「だから……幸せにするよ、スバル君」

「……それは僕の台詞だよ、ミソラちゃん 僕が君を……幸せにしてみせるから——」

「うん／＼／」

二人は目を閉じ、ゆっくり顔を近付けていき「はいすと〜〜〜
っぷ!〜!〜!」

「「ろ、ロック（君）!〜!」」

「ごめんなさね、二人とも」

「「は、ハープまで…」」

「えっと、『本編以上のことはできません』だそうだ」

「な、なんなんだよそれ!〜?」

「なんかね、そういうポリシーがあるらしいのよ、書いてる人に…」

「ぼ、ポリシー?! 僕聞いてないよ」

「えっと、『まさかヘタレなスバル君がそんなところまでいくとは思わなかったからです』、だそうだ」

「……………何それ」

「本当にごめんねスバル君」

「…………別に君が謝る必要ないよハープ 僕がヘタレなのが悪いんだよ、どーせ…………」

「す、スバル君……」

「まあドンマイってこったな、スバル まあ氣い落とすなってここで寸留めってことはどうせ本編のラストでキSぐはっ!!」「変に先読むなこのKY!!」

（あ、アッパーカット!?）

「まだ書いてもないんだからそんなこといったらいけないんだから!!」

「……………」

「なんとかいったらどうなのロック!!」

「ハープ、今ロック君KYじゃなくてK・Oだよ」

「あ……こ、コホン えっと私達、先に帰ってるから、ね じゃ、じゃあね〜」

ずるずるずる……………

「なんだったんだろう、これ」

「超番外編」

「そうだね、うん、うん……」

「当分お預けだね、スバル君」

「うん……」

「したい??」

「うん……って、ちょ、え!!」

ちゅっ

「……………（パクパクパク）」

「えへへ 頬っぺたならいいよね、多分」

「えっと……………う、うん／＼／」

「へへ よおし、じゃ、今日はこのあたりかな」

「うん、そうだね」

「クリスマスらしいことしてないね」

「家にきてよ 母さんがケーキ作って待ってるよ」

「お母様のケーキ!! 行く行く!! ぜっっつたい!!」

「決まりだね」

「じゃあ早速!!」

「わ、待ってよミソラちゃん 挨拶挨拶」

「あ、そっか」

「ほらほら えっと、皆さん、いかがでしたか番外編」

「いかがって言われても困っちゃうんじゃない??」

「はは それもそうだね」

「こんなのでも楽しんでもらえてたら嬉しいよね!」

「うん!それから本編は…多分もうあと半分程くらいかな」

「うん それくらいだと思うよ えっと、なのでもう少しお付き合いと応援、よろしくお願いします!!」

「じゃあ”しめ”いこうか せーの!!」

「Merry Christmas!!」

超番外編！クリスマスバミソトーキング！？（後書き）

Merry Christmas！です！！
しようもないこととしてすみませんでした（汗）

これが多分今年最後の更新ですw
皆様、今年一年ありがとうございました！
良いお年をお迎え下さい（・ω・）

10.7..敬遠犬猿輕快

俺等はコーウ、アス達と別れてエニシタウンへと到着していた。大吾が言っていたように町に入った途端、本当に景色が一変した。時代劇でお馴染みのような建物が沢山。

それより古るそうな造りの場所もあって中々面白そうな場所だ。祭の中心とみられる神社へ行くまでの道には数え切れない程の人間が居て、ずらりと出店が並んでいた。

焼きそば、タコ焼き、焼鳥、かき氷、綿菓子、焼きトウモロコシ、大判焼き、鯛焼き、金魚、林檎飴、杏飴、冷凍パイン、アイスクリームにフラッペに……………………

今までテレビでしか見たことがないような食べ物が俺の目に飛び込んだ。

「…………ちよつとちよつと」

ハープが俺を肘で小突いた。

何しやがる！と言いかけたが、あいつは呆れた眼をして自分の口の端を指差していた。

…………。

無意識のうちに呆気て口を開けっ放しにしていたらしい、涎が垂れていた…………。

俺はぐいっと手で拭う。

「だらし無いわよロック」

「るっせえなあ…………」

流石の俺も恥ずかしくなった。

「あなたに羞恥心なんかあったの？」

「るっせえ!!」

ナチュラルに心を読まれた気がするけどあえてスルーしよう。

「けどよ、こんだけうまそうなものが並んでんだぞ……俺、人型になれて本当ラッキーだったぜ!!」

うまいものが食える……前はスバル達が食べてるのをただみてるだけだったが……今は違う!!
まだ食べたことがない食い物が俺を呼んでいる!!!!

(……一緒に歩くの……ヤダ)

ハープがどう思ってるかなんか知らないが、俺は眼を輝かせ一人で騒いでいた。

『常識の欠片も見受けられない人がいると思えば、あなたでしたか
ウォーロック』

どこからか声がした。

なんだあの嫌味ったらしい口調、人を小馬鹿にしたような言葉遣い、
神経を逆なでする声……

「その声……アシッド!!」

そいつは幾何学的な装甲が特徴、俺達FM星人とは違い人工的に作られた電波体、俺に何かと付けていちやもんつける嫌な奴……アシッドだった。

『こんな所で大声を出さないで下さい　まったく、あなたという人は……』

「ああ?! てめえ喧嘩売ってんのか!？」

『喧嘩? あなたに??ふ』

「鼻であしらいやがったな………上等だ!! やってやるぜ!!」

『この人ばかりでウェーブバトルをしてご覧なさい　迷惑千万です』

「千万だろうが億万だろうが関係ねえ!!」

『これだからあなたは……』

「もう怒った、怒ったぞ俺は……!!」

「ちょっとロック!!」

「それくらいにしといてくれないか、ウォーロック」

俺を止める軽快な声がした。

振り向くと二人の人間が下駄をカランカランいわせて近づいてきていた。

10.7..敬遠犬猿軽快（後書き）

お久しぶりです。

新年になっても相変わらずの亀足であります…。

アシッドでできましたw

例の如く口調がわかりません…。

受験が終わったらゲームを買おう、うん……。

そして新たに出てきた2人……誰だか展開的に簡単にわかつちやいますよね（笑）

あともう二話ほどでスバミソに戻りますからもう少しお待ちを↑
今年の夏までには終わりそうですから↑

では、お読みいただきありがとうございました！

10. 8..難しい二人

俺達の争いを止めようと軽快な声がした。

その声の主は瞬時に想像できた。

アシッドがいるんだものな……

「あ、暁……………く、クインティ…ア??」

「よっ！」

「こんばんは、二人共」

男の方は青黒い髪 of 自称ヒーロー、アシッドをウィザードとするサテラポリス遊撃隊隊長、暁シドウだ。

いつものジャケットではなく白い浴衣に抹茶色の帯という格好でいくつかのビニール袋を手提げしていた。

その隣にいるのはクインティア。

スバルの学校の先生をしたり、ディーラーの一員だったりで、今はWAXAで働いてる女。

因みにジャックの姉貴だ。

そいつはいつもの服装と同じような色の浴衣を着込み、髪型はいつもの二つ分けでなく、後ろに一つにくくっている。

ぱっと見わからなかった。

「クインティアさん綺麗…すっごく!!! いつも綺麗だけど更に!!!」

「あら、お世辞が上手ね、ハープ」

「お世辞だなんて 事実よ、じ・じ・つ」

「ふふ ありがとう でもあなたの方が綺麗だと思うわ」

「そっちこそお世辞じゃないの」

談笑してるハープとクインティア。
それを見ている俺達三人。

「いやゝいいなあ 美人が戯れてるっていうのは」

『シドウ、危ないですよ 発言が』

「美人？ハープが？？」

『それは女性に対して失礼ですウォーロック』

俺達の会話一つ一つにアシッドがつつこんできた。
せわしない野郎だ。

「とかいってゝ 内心一緒に歩いててニヤニヤしてるんじゃないの
かウォーロック、あはははは」

俺がハープにニヤニヤ？

冗談じゃねえ。

ちよっといつもとちがって、

ちょっといつもより仕種が落ち着いてて、
ちょっと浴衣が似合ってるだけなんだからな。

「ニヤニヤしてんのはテメエだろうが」

「ふ、それは仕方のないことだ 俺の頭の中の100%はクインテ
ィアでできてr「気持ちの悪いこと言わないで シドウ」

いつの間にかこっちの話を聞いていたクインティアがいつもの表情
でももいっつきり暁の足を踏ん付けた。

しかも下駄で……………

暁は声にならない悲鳴を上げていた。

”やり過ぎじゃないの?”

”…………大丈夫よ”

女共からはそんな会話が聞こえてきた……………。

(確かに…ピンヒールよりましだな)

暁が眼に涙を溜めて笑いながら俺の肩に寄り掛かってきた。

俺は何故か恋愛ってのは大変なもんなんだな…………、と思った。

10. 8..難しい二人（後書き）

お久しぶりです。

待って下さっていた方も待っていなかった方もお待たせしました…

（汗）

どんどんクオリティが下がってるような……

クインティアさんが難しいです…

そしてシドティアファンの方、すみませんでした！！（土下座）

では、およみいただきましてありがとうございます！

10. 9..波乱の伏線（前書き）

タイトルが活きてくるかは不明です↑

10. 9.. 波乱の伏線

「で、お前ら何しにきたんだよ」

「やめなさいよそんな言い方 お祭りを楽しむのに理由はいらないわ」

「いや、よく聞いてくれたウォーロック！俺にだってちゃんと理由がある……俺の真の目的、それは祭の警備だ！！いつ何時、ウィルス達が悪さを働くかわからないからな 俺はサテラポリスの隊員として日夜善良なる街の人々の安全を守る義務がある！！だから俺は目を針のようにしてだなあ……」

『嘘をおつきなさい シドウ』

「デスクワークがいやで長官に泣き付いたんじゃない」

上から俺、ハープ、シドウ、アシッド、クインティアが言った。

「……俺だって祭くらい楽しみたい……ヒーローだって命の洗濯が必要だ！！そうだろウォーロック！！」

「若干前の台詞と言ってることが違うぜ」

『まあ気にしないで下さい シドウはこうみえて相当なお祭り好きなんです デスクワークとお祭りなら二秒も要らずお祭りをとるでしょう』

「それは違うぞアシッド!!! 0. 000000.....1秒後だ!」

変な所で胸を張る暁がいた。

お前はいつからお笑い要員になったんだ？

「シドウ、そろそろ行きましょう」

クインティアが暁の袖を引っ張って促した。

「ん？どうしたクインティア」

「空気読みなさい」

そうクインティアに言われて、暁は俺とハープを見た。

するとグーにした右手をパーにした手に打ち付けて古典的に閃きを表した。

「そうか、うん、わかった 邪魔者は退散するさ、な、クインティア、アシッド♪」

ハープがよくスバルとミソラがいちゃついているときに” 邪魔者は退散しましょう”、って言ってる。

だから意味はわかった。

暁が親指を立てて言った。

馬鹿にされたような気分になったので、俺はその指をへし折りたくてしようがなかった。

「そうだウォーロック、これやるよ」

暁は俺に提げていた袋の一つをふっと手渡した。

中には何をどうチョイスして買ったのかわからない物々が攻めぎあっていた。

「すぐ固まるハイパーワックス、ミニカー、6B鉛筆に財布に……なんだよこれ」

「おっと財布は俺のだ」

暁は手を突っ込んで財布を取り懷に仕舞いながら言う。

「射的でとったんだよ 俺はうまい棒が欲しくてやったんだがなかなかしぶとくてな うまい棒5本に600ゼニーもつかってしまっ
た」

豪快に笑ってお目当ての戦利品を見せ付けてきた。

暁、お前清々しいほど阿呆だよ……。

「ま、とっといてくれ どれも俺には必要ないからな」

「俺にだってねえよ 寧ろ俺の方がねえよ!!」

暁はまあまあと宥めるように俺に袋を押し付けた。

「スバルにでもやってくれよ」

スバルがなんもん欲しがるかぁ！！と突っ込みたかったが……やめておいた。

袋の片隅に小さな球みたいな物があつた。

現代の技術で作られたものじゃないようで、プラスチックの透明なものの中に水が入ってて中は黒っぽいもので仕切られている。その左右に小さな星が沢山入ってる。

揺らすとその星はゆっくりと動く。

まるで星が降るように。

こういうのが好きそうな奴だから、もって帰ってみるのも悪くない。だから俺はそのまま袋を手提げた。

「（わかったアシッド？二人が良い雰囲気になったら邪魔しちゃダメよ こっそり、ね）」

『（わかっていきますとも ウォーロックと同じにしないでください）
』

「（それもそうね）」

『（二人で行かせた方がよいとは思いましたよ ですがシドウはいまいち女性を思っているにも蔑ろ：ではありませんが突っ走ってしまうところがありますから まあクインティアは大人ですから なん

とかなるのでしょうか)』

「(暁さんが子供みたいね まあいいわ 二人の仲、見守っててよ)」

『(ええ)』

俺達がいざこざやっているうちに、ハープとアシッドがこそこそ話していた。

たまに不思議と仲が良いあいつら。不思議だ。
ハープの奴がいやに上機嫌だったのがなんとなく複雑だったがな。

暁達と別れた俺達は祭へと足を進めた。

だが…

「「おかしい……」」

同時に眩き同時に立ち止まった。

「……あなたもそう思う？」

「まあな…人間ばかりで確かかどうかかわからねえが…」

俺達が同時に感じた違和感。いや、本当はもっと前から感じていたのかもしれない…祭で浮かれてたからな……

「「スバル（君）」とミソラの周波数がない…」」

正確に言うところらの雑踏一帯に、だ。

「私達が早く来過ぎた…ってわけでもないわよね…」

「時間も潰したしな　それは有り得ないだろうな」

「……はぁ」

ハープは肩を落としたため息をついた。

「どした　なんかわかったのか？」

俺が聞くとあいつは”またね…”と片手で目を覆って話した。

「大方騒がれちゃってるのよ、ミソラとスバル君がね」

なるほど。

俺も合点がいった。

ミソラは有名なアイドル歌手で、スバルは地球を救ったヒーロー。二人も揃えばそれは一騒動だ。

人間って奴は難儀だなぁ。

「折角の時間が……休みを作れたことだけで満足し過ぎてたわ 変装も何もさせてない……はぁ」

ミソラはそういうのに大雑把らしい。

スバルとのデートもよく” 普段のミソラ ” でやってくる。

スバルが変装しろしろうるさかったつけ。

そういうこともあってハープが” デートを成功させるわ!! ” とミソラを変装させ始めた。

派手好きで目立ちたがり屋だったあいっはどこにいったのか。ってなわけで、ハープはミソラに変装させなかったのを後悔してるってわけだ。

どうしようどうしようとあたふたしたりうううう唸ったりしている。今にも泣きそうだ。

何もそこまで神経質にならなくても良い気もするが……。

「決めたわ!!」

びくつとした。

いきなり声をあげるんだもんな。

まあ周りは賑やかなので俺以外に驚いた奴はいないが。

「決めたわ決めた……ロック、ミソラ達を探しにいくわよ!!」

「は?」

「なんとかして二人を助けるのよ」

「お前近寄るなっっていつてたじゃねえか」

「それはそれ、これはこれ！！騒ぎが起きたわけじゃないけど……
なにかあったらなにかあったでなにかなかったらなにかなかったな
の……ね、ロック……」

……しおらしいこいつは苦手だ……勝てねえからな

「たつくしょうがねえな……俺はスバルの周波数、お前はミソラの周
波数 どうせ一緒にいるだろうがな 探して会えば満足だろ 行く
ぞ」

俺はあいつの頼みを聞き入れ進みだした。

「……ロックう……！！！」

嬉しかったのかなんなのか、ハープは俺の背中に飛び付いてきやが
った。

次驚いたのは俺だけでなく周りもで、辺りの祭気分の人間が”ヒュ
ーヒュー”だとか”羨ましいねえ兄ちゃん”とか囃し立ててきた。
ハープはその声を気にせず口角をへにゃ〜と緩めてへにゃ〜と笑
っていた。

そうか、目立つって恥ずかしいことなんだな……と、俺は初めて思った。

ものの数分で、俺達はいつら二人の周波数を突き止めた。
祭から離れた雑木林。

そこにはお馴染みの奴らの周波数もあった。

一波乱起きたのは間違いないみたいで、何やら話をしていたが解決策が見つからず途方に暮れているらしい。

だから俺はいつらの前に行った。

「面白そうなことしてんじゃねえか 俺もまぜてくれよ」

ってな。

10. 9.. 波乱の伏線（後書き）

お久しぶりです。

ここまで投稿しなかったのは初めてです（笑）

テストやら演劇やらなんやらが重なって…他の方のも見えてないし…

火曜日まで全国大会で日程的には大変なんですけど電車で寝ずに頑張って書きました（笑）

やっとウィザード編終了ですw

長い道程でした…。

やっとスバミソができます（笑）

やっぱり僕は暁さんの性格を取り違えてるように思います（笑）アシッドもおかしい（笑）受験が終わったら流星買うぞー！！

ではではお読みいただきありがとうございました（・ω・）w

11:とおき(前書き)

お久しぶりです。

11..とっておき

もう説明しなくても良いと思うんですけど、茂みからでてきたのは人間姿の僕らのウィザード、ウォーロックとハープでした。皆何度かその姿の二人を見ていたのでそれ自体に驚くことはなかったけれど、突然の来訪者は僕等の寿命を縮めた気がしました。野次馬にみつかったらレゾンどころじゃないしね。

「ミソラ~~~~~」

ミソラちゃんの姿を確認するやいなや、ハープはミソラちゃんの元へ走り寄りぎゅっと抱きしめた。

「く、苦しいよハープ… 髪型くずれちゃうよ」

実に苦しそうでした。

何せ身長差と抱きしめ方的に、ミソラちゃんはハープに窒息死されかねない位置に顔がありましたから…

あまり説明させないでいただけると助かります…

「で、お前ら これからどうするんだ？」

突然ロックが僕等に話を振ってきた。

皆きょんととしていたけれど、すぐにそれなりに事情を理解しているのだと思った。

というかロックがこういう心配をして声をかけてくるとは………僕を含め、全員が思っていなかったらしい。

そんな視線を送っていると、ロックは眉をひそめて怪訝そうな顔をした。

「どうするも何も策がないんですよ」

切り出したのはキザマロだった。

「変装させようにも何もないのよ」

続いて委員長。

「あ、俺いいこと考えたぜ！！お面買ってつけたらいいんじゃないか？顔もみえねえし！！」

ゴン太が名案とばかりに叫んだ。

僕も気がつかなかったけれど、それは良い考えだと思って賛同しようかと思った。

けど…

「俺もそれは思ったぜ」

「僕も一応」

ジャックとツカサ君が苦笑いをしながら言った。

「私も考えたわよ…」

「僕もですけど……」

委員長にキザマロ。

賛成ならそうしようよ、と言おうとした……
が、

「「「スバル（君）の髪型じゃあ（では）な（ね）……」」「」」

……皆の

苦笑いの訳がわかりました。

「スバル君の髪型だけが問題な訳じゃないよ 私だってほら こんな赤髪の人滅多にいないよ」

ミソラちゃんが僕の肩を優しく叩いた。

君は優しいね、ミソラちゃん…

背中はまだぎゅゅとしてゐるハープを引きずってることは僕の眼には見えないよ。

「まあ私の場合、髪の色かわったら”響ミソラ”って確実にばれないんだけどね」

確かに、ミソラちゃんを見た時に1番に目をひかれるのは綺麗な赤い髪だ。

顔は勿論かわいいけどね。

比較の問題だよ。

「ミソラ、なら”とっておき”のやつ、協力するわよ」

さっきまで抱き着いていたハープがしゃんと立った。

”とっておき”

それが皆の耳に引っ掛かった。

「”とっておき”とは果たしてなんなんですか？」

キザマロが眼鏡の縁をくいとあげた。

ハープは笑って”とっておきはとっておきよ”と、人差し指を立てて答え、ミソラちゃんの方へ向き直った。

「じゃあハープ、”あれ”していいの？」

「もう絶対気をぬいちゃダメよ」

「ういっちゅ」

ミソラちゃんの言う”あれ”と言っているものが”とっておき”らしいけど…

ああ余談だけど、ういっちゅっていうのはミソラちゃんが最近はまってる言葉。

”了解”

という意味らしいです。

「”とっておき”心得ー一つ！」

「いかなる時も油断しない！」

「一つ！」

「お互い繋がっていることを忘れない！」

「一つ！」

………体育会系のノリでミソラちゃんとハープが心得らしきものを唱えています。

僕等はそれを目を丸くして見えています。

二人とも声がよく通っています。

人が不思議に思ってくるのも時間の問題のような気もしますが、あまりの二人の真剣さ故、誰も突っ込むことができませんでした。

「……………ます！！」

最後の一つを終えたらしい。

ハープがうんうんと了解したように頷いている。

「じゃ、やり方は前と一緒にね」

「わかってるよ　よろしくね」

そういうとミソラちゃんは巾着からハンターVGを取り出して、それを額に当てた。

そしてそのまま

「トランスコード、004　ハープ・ノート……」

ミソラちゃんは電波変換時の台詞を唱えた。
語尾に小さく何かを言ったらしいが聞き取れなかった。

そして不思議なことにハープはハンターに戻っていない。
変わりかはわからないけれどミソラちゃんの持っているハンターに
同じように額をつける。

まばゆい光が二人を包む。

僕等は眼をつぶった。

「…………よし、完了!!」

その声は電波変換と放たれた光の終了を意味するもの。

僕等は眼をあけた。

そして驚いたことに、そこにはハープと一緒にハープ・ノートとも
いえない、ミソラちゃんとも言えない金髪の女の子、いや、どちら
かというとミソラちゃん、がたっていた。

僕等は驚きの表情を隠せていなかったらしい。

そんな僕等をみて、二人はにんまりと笑ってこう言った。

「「これぞ、部分変換♪」」

さほど格好よくは聞こえない決め台詞だったけれど、無邪気に笑う二人はなんとも言えない愛らしさがありました。

11..とっておき(後書き)

お久しぶりです。

といいますかはじめてましての方が正しい方が多い気もしますが。
放置してから半年近く経っていますが、その期間中に沢山の方が足
をお運び下さっていたようで感謝感謝にございます。

今回投稿したお話、僕のホームページを見て下さっていたかたはわ
かると思いますが、大分前から載せていたものです。

今までこちらに載せなかったのは、書いていたことを忘れていたか
らです↑

深い意味はないです↑

因みにまた投稿し始めよう、と思ったのは巨匠A様に感化されたか
らです。

すぐに影響される奴です僕。

そんなこんなで我が道を転がりながら進むようなマイペース野郎の
作品ですが、また、もしくはこれからよろしくお願いいたします。

m (. .) m
| . . |

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9722h/>

君が1番……

2011年5月7日05時41分発行